

2段階（12世紀中頃～13世紀） 大型総柱の出現と隆盛 県内の中世遺跡が安定的に増加し、当遺跡も出現する。総柱は梁行3間以上の大型が出現する。大型化に伴い面積も200m<sup>2</sup>以上の巨大なものも現れる。<sup>註17</sup> 主体の建物は50m<sup>2</sup>以下であるが、51m<sup>2</sup>～100m<sup>2</sup>が一定程度占めている。県内建物一覧表（第17表）によれば、梁行2間×桁行2間～4間が36%、梁行3間×桁行3間～5間が27%、梁行4間×桁行4間～6間が19%、梁行1間×桁行2間～4間が10%である。梁行1間～2間と3間～4間がほぼ同数である。大型総柱建物（Ⅰa）が主体に、小型総柱（Ⅰa）や側柱（Ⅲa）が附属する建物構成を取る。面積では、101m<sup>2</sup>以上、100m<sup>2</sup>～51m<sup>2</sup>、50m<sup>2</sup>以下の大・中・小や大・小の組合せとなるが、倉庫とセットにならない総柱単独構成もある。倉は共同の倉あるいは総柱内の倉の存在を考えられる。柱間は200cm以下もあるが、多くは230cm～270cmである。堅穴状土坑を伴う建物もある。

3段階（14世紀～15世紀前半） 大型総柱の衰退と中抜け側柱の展開 中抜け側柱（Ⅱa）は13世紀から梁行3間以上の大型が出現する。14世紀になると、梁行2間以下に小型化し、側柱（Ⅲa）が主体を占める。大型総柱が衰退するが、梁行2間の小型総柱（Ⅲa1）が残る。梁行1間が57%，2間が19%，3間が24%である。1間が主体を占める。建物の大・中・小のセットが崩壊し、50m<sup>2</sup>以下が主体を占める。柱間は300cm以上が目立つ。15世紀には単独の堅穴状土坑が確認できる。

4段階（15世紀後半～16世紀） 小型と大型側柱の混在 16世紀にはこれまで縮小してきた柱間が拡大する。側柱（Ⅲa）は梁行1間～2間で50m<sup>2</sup>以下が主体を占める。柱間は400cmを越えるものが現れる。弓庄城跡では16世紀後半から大型楕円柱穴側柱（Ⅲb2）が出現してくるが、柱穴の長軸は130cm以下である。梁行1間の側柱（Ⅲa）や小型総柱（Ⅰa）が残る。当遺跡では大型円形柱穴側柱（Ⅲb1）が16世紀後半から確認できる。礎石建物は木舟城下町の開削大滝遺跡（16世紀）で確認されている。<sup>註18</sup>

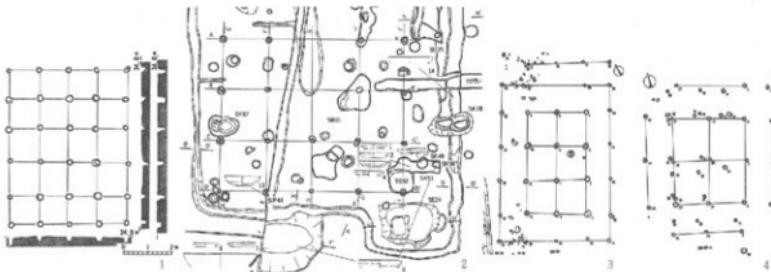
5段階（17世紀） 大型楕円柱穴側柱の隆盛 梁行1間を基本とする大型楕円柱穴側柱（Ⅲb2）が主体を占める。17世紀後半になると規模・面積を縮小する。

6段階（18世紀） 土台建物の出現 大型楕円側柱が衰退し、土台建物が出現する。大型と小型があり、近世民家につながっていく。4段階～6段階の動きは3節で詳しく述べられている。

県内の掘立柱建物

以上で示した建物の分類と段階の様相を県内の主要遺跡で確認してみる。

北反畠遺跡（文献1） 中世条里地割りを施工された地域で、調査区では約100m四方の区画（1坪）を検出している。建物は総柱建物（Ⅰa）が10棟ある。12世紀後半は桁行2間×梁行2間以上、5間×4間、7×4間で、面積は24m<sup>2</sup>以上、121m<sup>2</sup>、178m<sup>2</sup>である。5間×4間の建物は周囲には溝（雨落ち溝）や土坑があるが、井戸、倉庫や納屋などは伴っていない。13世紀は1/4坪の中に集中し、3棟存



第318図 県内の中世前期総柱建物（S=1/400）

1.北反畠SB90 2.小倉中畠SB01 3.南中田ASB01 4.南中田ASB67

在する。平面積は100m<sup>2</sup>前後、50m<sup>2</sup>前後、20cm前後に分かれ、大・中・小のセットになる。14世紀になると総柱は2間×2間の小型になる。柱穴の規模・長軸比率は12世紀後半～13世紀ではほとんど変化がない。長軸43cm～52cm×短軸33cm～47cmで、長軸比率は1.09～1.36である。伊藤隆三氏はこの大型総柱建物を「農業の管理・経営を主たる目的とした「在宅」住居」と推測されている。

小倉中稻遺跡（文献9） 13世紀前半の建物は3棟あり、総柱は2棟である。桁行2間～4間×梁行2間～3間で、平面積は47m<sup>2</sup>と16m<sup>2</sup>～17m<sup>2</sup>で、大・小のセットになる。特に、四方に溝を巡ぐる区画内には4間×3間の総柱建物（I a）と井戸を伴うが、倉庫や納屋はない。農民層の屋敷地の在り方を示している。附属する側柱建物は2間×2間で、小型柱穴である（II a 1）。14世紀の建物は廂を入れた3間×3間の総柱建物で、中央に竪穴状土坑が付く。16世紀の建物は廂を入れて3間×2間の大型総柱建物で、竪穴状土坑が付く。面積は24m<sup>2</sup>～30m<sup>2</sup>で、桁行・梁行が並んでいる。（共にI a 1）。

神田遺跡（文献2） 12世紀後半～13世紀前半を中心とする掘立柱建物が20棟検出した。3棟の梁行1間の側柱（II a類）以外は全て総柱建物（I a 1）である。皿状の浅い竪穴状土坑が隅に付くと考えられる建物が2棟ある。柱間間隔は桁行240cm～300cm、梁行240cm～270cmで、200cm以下はない。造構配置や遺物から開発領主クラスの遺跡と考える。総柱建物の構造などは当遺跡と類似し、Bタイプである。梁行2間と3間～4間が1：1の割合である。平面積は12m<sup>2</sup>～42m<sup>2</sup>（55%）、67m<sup>2</sup>～73m<sup>2</sup>（10%）、101m<sup>2</sup>～130m<sup>2</sup>（35%）に分かれ、前者が主体を占める。

県総合運動公園内遺跡群（文献3・4・6） 12世紀後半～14世紀を中心とする掘立柱建物114棟が検出した。その内、12世紀後半～13世紀の建物は柱間が200cm～280cmである。60棟の内48棟が総柱建物（I a 1）で、側柱建物は2間×1間が9棟である（II a 1）。上述したように、建物の廂の柱穴が小さい。吉倉B遺跡では、13世紀の建物は総柱23棟で側柱9棟、13世紀末～14世紀中葉は総柱6棟で側柱1棟である。総柱は梁行3間～4間（43m<sup>2</sup>～96m<sup>2</sup>）が3棟ある。総柱は棟数を減少しているが、大型総柱が残る。南中田D遺跡では15世紀の建物は14棟があるが、側柱が64%を占めている。柱間は400cm以上が2棟、200cm以下は4棟あり、両極に分解されている傾向を表す。

じょうべのま遺跡（文献10） 古代初期莊園の庄家跡の北側にあるC地区から、13世紀前半の掘立柱建物3棟が検出した。全体の分かる建物は1棟だけで、桁行3間×梁行2間の身舎に四面に1間の廂が付く（II a）。身舎の柱間は270cm～300cm、東西廂の柱間は120cmである。身舎の柱穴には小円礎が置かれている。身舎と廂の柱穴はほぼ同規模である。長軸比率は1.17、1.10で、平面形は共に円形・梢円形である。四面廂の側柱建物は当時では県内唯一の例であり、同時期の中世の総柱建物の隆盛状況に較べると古代的な様相である。身舎は側柱であるが、構造は3間×2間の総柱に側柱を巡らしたものと同じと考える。これは岩手県柳之御所跡で見られる側柱建物と類似する。<sup>119</sup>

香城寺遺跡（文献16） 15世紀前半と考えられる側柱建物2棟で、1棟は竪穴状土坑の上屋である。柱穴は100cmを越える梢円形・円形である（II b）。もう1棟は2間×1間の建物で、柱間は梁行375cm、桁行450cmである。寺院関連のためか、柱根は直径20cm以上で、掘形は大型である（II b）。

弓庄城跡（文献5） 12世紀後半～13世紀の建物と15世紀末～16世紀の建物がある。前者の15棟の内、総柱（I a）は13棟で、竪穴状土坑を伴わない。柱間は210cm～300cmである。柱穴は30cm～50cmで、円形か梢円形である。後者の44棟の内、39棟が側柱である。わずかにある総柱は2間×2間のもので、規模・平面積も縮小している。柱間は3m以上が24棟、210cm～270cmが8棟、2m以下が6棟である。柱穴には26cm～54cm×25cm～42cmの円形、85cm～121cm×56cm～78cmの梢円形がある。梢円形柱穴は長軸130cm以下で、近世の梢円柱穴よりやや円形に近い（長軸比率1.19～1.59）。

楕円形柱穴は16世紀後半と考えられる。全部で6棟あるが少ない。内、床束柱を持つ建物は3棟ある。

#### 北陸の掘立柱建物

以上、富山県内の掘立柱建物の動向を総観してきた。そこで、特に、北陸の中世前期建物をあり方と比較検討する。四柳嘉章氏は石川県穴水町西川島遺跡群を取上げて能登の中世建物の変遷を示している。<sup>注21</sup>それによれば、大型純柱建物は12世紀後半～13世紀初めに出現する。桁行7間×5間×梁行4間で、平面積は116m<sup>2</sup>～246m<sup>2</sup>である。それに2間×2間の小型建物(20m<sup>2</sup>前後)が附属し、井戸がセットになる。柱間は240cm～280cmである。柱穴は30cm～40cm×25cm～40cmで、長軸比率は1.0～1.2である。13世紀後半になると、最大でも71m<sup>2</sup>～97m<sup>2</sup>の純柱建物となり、小型になってくる。白山橋遺跡では4間×2間の小型側柱建物(40m<sup>2</sup>)が現れる。14世紀以降、2間×2間、3間×2間の側柱建物が主体となり、平面積が縮小する。柱間は200cm以下のものも現れる。柱根も芯土材から芯持材に変化する。15世紀の美麻奈比古神社前遺跡では200cm以下の柱間、21cm～36cm×20cm～24cmの小型柱穴(長軸比率1.3～1.5)が現れる。以上の純柱は上述した純柱Bタイプで、堅穴状土坑が伴わない。この旧能登国<sup>注22</sup>の建物変化は富山のそれと類似している。特に、大型純柱建物の出現が12世紀後半から出現してくることと、14世紀以降、柱間や平面積が縮小する点である。

石川県加賀市三木だいもん遺跡は12世紀初め～14世紀中の時期で、純柱建物を主体とする。12世紀初めは桁行4間×梁行2間が主体で平面積は50m<sup>2</sup>以下である。12世紀後半に6間×4間以上の大型純柱建物(117m<sup>2</sup>以上)<sup>注23</sup>が出現する。13世紀後半にも画期がある。大溝が掘られ、8間×5間の純柱建物(226m<sup>2</sup>)が作られ、隆盛を極める。しかし、面積は収縮していき、14世紀中では4間×2間の純柱(34m<sup>2</sup>)が最大となる。堅穴状土坑が伴っていない純柱はAタイプもあるが、Bタイプがほとんどである。

新潟県上越市子安遺跡でも12世紀後半～13世紀から2間×2間の純柱に四面廻付き建物が出現する。面積は92m<sup>2</sup>である。身舎の柱穴は40cm～50cmの方形、廻は径30cm前後の円形である(純柱Aa)。

このように、北陸では大型純柱建物が12世紀後半から出現すること、純柱建物が住居として普遍的に見られることが分かった。この時期は北陸に京都系の影響を受けた非クロコ土器が出現することと軌を一つにしている。京都系の影響を別の面から表している現象と考えられる。しかし、14世紀ごろから大型純柱建物が減少し、建物の面積も縮小化に向かい、中世後期への変化につながっていく。

(宮田進一)

- 注1 繕物の復元に付いては、文化庁建造物課説官本長二郎氏の指導を受けた。記して謝意を表す。
- 注2 越前櫛谷1987「掘立柱建物について」『越前櫛谷・吉倉1遺跡・高島1遺跡』富山県歴史文化財センター
- 注3 朝香邦子1993「C地区」『越前櫛谷・吉倉1遺跡』(4) 平成4年度 富山県歴史文化振興財團
- 注4 20世紀後半～21世紀初頭他1987「西日本一島遺跡」『近畿地方の古墳時代の建築』文部省教育委員会
- 注5 21世紀後半～22世紀初頭他1998「三木だいもん遺跡」『三木だいもん遺跡』加賀市教育委員会
- 注6 丹波篠山1993「中世農村の住まい」『通説明日香村日本の歴史2』朝日新聞社
- 注7 丹波今井氏の研究による『櫛谷の武家屋敷における掘立柱建物』
- 注8 大河内一矩1994「櫛谷の武家屋敷での櫛谷立柱建物の性質」『櫛谷の武家屋敷の調査』越中町教育委員会
- 注9 丹波篠山1985「新町1遺跡の古代掘立柱建物群の性質」『新町1遺跡の調査』越中町教育委員会
- 注10 丹波篠山・今井2003「櫛谷遺構の調査と復元」『新説古代の日本』第10巻 角川書店
- 注11 宮沢豊士1992「越中国の中世から近世へ」『日本名建築全真集全20卷第17巻民家』飛鳥社 新潮社
- 注12 川上1987「越前櫛谷・櫛谷立柱建物の発掘」『越前櫛谷遺跡』京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注13 このタイプは櫛谷市佐助ケ谷遺跡出土の建物指図にも見られる。4間×10間に2間×3間の部屋が付いている建物である。3間×4間の空間の内側に柱がなく、床束柱を複数構造である。検出した建物からこの間を板壁掘立柱建物と考えられている(青木秀雄1993「板壁掘立柱建物について」『佐助ケ谷遺跡発掘調査報告書』)。ここでは、板壁かどうかは分からぬか、「類の床束柱による空間の拡大と考えたい」。
- 注14 安念幹倫、林 淳明1983「富山県小矢部市桜町遺跡－彦坂地区発掘調査概報」小矢部市教育委員会
- 注15 西河健二1993「越中における櫛谷」『中世北陸の家・屋敷・暮らしぶし』北陸中世土器研究会
- 本文で述べた程階設定は大筋では西河氏のそれに従っている。
- 注16 宇野龍太1991「櫛谷」『中世社会の考古学』吉川弘文館
- 注17 現在在県内最大の櫛谷立柱建物は田代遺跡のS1B15号、10間×5間の約320m<sup>2</sup>である(文献8)。
- 注18 西河健二1994「開拓大遺跡C地区」『越前櫛谷・吉倉1遺跡』(5) 平成5年度 富山県歴史文化振興財團
- 注19 丹波篠山・今井2003「櫛谷立柱建物の平面形態と復元」『櫛谷の武家屋敷の検討資料』
- 注20 井手秀治1984「上新ハイパス開削遺跡発掘調査報告書」『今池遺跡・下新田遺跡・子安遺跡』新潟県教育委員会
- 注21 丹波篠山・今井2003「櫛谷立柱建物」『越前櫛谷・吉倉1遺跡』(4) 平成4年度 富山県歴史文化振興財團
- 注22 12世紀～13世紀の北陸以外の大型純柱建物は、秋田県下夕野遺跡・中田面遺跡、神奈川県上浜田遺跡、櫛谷の遺跡群、滋賀県湖東郡遺跡・正伝寺遺跡、大阪府和泉遺跡、兵庫県福田天神遺跡などがあるが、京都の影響を強く受けた岩手県柳ヶ御所跡の例のように京都系=純柱の標榜とはならない。
- 注23 12世紀～13世紀の北陸以外の大型純柱建物は、秋田県下夕野遺跡・中田面遺跡、神奈川県上浜田遺跡、櫛谷の遺跡群、滋賀県湖東郡遺跡・正伝寺遺跡、大阪府和泉遺跡、兵庫県福田天神遺跡などがあるが、京都の影響を強く受けた岩手県柳ヶ御所跡の例のように京都系=純柱の標榜とはならない。



### 3 中世末から近世の建物

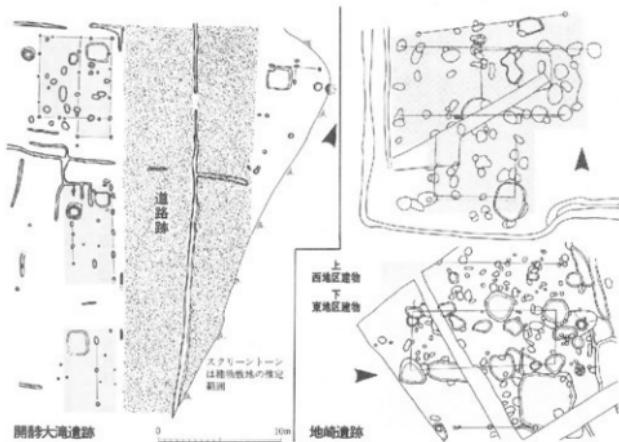
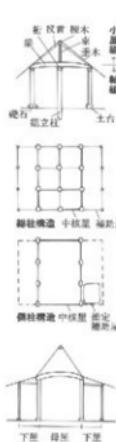
三ヶ年にわたる梅原胡麻堂遺跡の調査で、円形・大型円形・楕円形柱穴をもつ掘立柱建物や、石列を伴った大型の竪穴状土坑（土台建物）といった中世後半から近世に属する建物跡が検出された。これまで当時期の建物跡については調査例が少なく、その内容等は明確でなかった。当遺跡の調査はその空白を埋める意味で貴重なものだが、まず当期の建物の変遷を明確にする上で、以下の二つの視点が鍵を握っているのではないかと考えている。一つは中世前半に特徴づけられる絶柱の掘立柱建物がどのような形態変化を遂げ、どのような要因で消滅していくのか、今一つは現存する古民家に見られるような土台上（転根太・切石・礎石など）に建てられた建物がいつ頃に出現し、どのような痕跡として現れるかである。この点を主眼にして建物の変遷を捉えてみたい。

なお、ここで用いる用語を定義しておく。楕円形柱穴とは厳密にいえば隅丸長方形であったり、限りなく円形に近いものなどがあるが、長軸・短軸に差があるものを総称して呼んでいる。さらに、楕円形柱穴をもつ掘立柱建物については略称として楕円柱穴建物と呼称しておく。土台建物と認識している遺構については、建物としての性格を与える以前では（石列を伴う）大型竪穴状土坑と呼称している。建物の構造については、梁・桁を含まない上部を小屋組（屋根）構造、梁・桁を含む下部の柱装組を軸組構造とし、平面構造では誤認を防ぐため構造認識上で中核となる柱穴に囲まれた部分を仮に中核屋と呼び、その外部を補助屋と呼ぶことにする。また、正確な上屋構造や間取りなどが判明している場合には母屋（身舎）・下屋（廂）で区別する。梁・桁については便宜上長軸を桁、短軸を梁とする。総柱構造とは梁行が2間以上で基盤目状に柱が並ぶものをさし、それ以外のものを側柱構造とする。特に梁行が1間であるものについては梁行1間構造と呼ぶ。（第319図）

#### A 楕円形柱穴による掘立柱建物とその前後

##### 1 県内の状況

県内で中世後半以降の遺跡から検出される建物遺構は掘立柱建物、礎石建物、土坑である。この中で礎石建物が検出される例は城館や寺社といった特殊なものに限定され、一般集落例とは一線を画する。これまでに調査された中世後半の各遺跡の状況についてはすでに述べられているので省略するが、



第319図 用語例

第320図 開勝大滝遺跡・地崎遺跡の建物平面図（1：400）

円形柱穴縦柱構造→円形柱穴側柱構造→大型円形柱穴側柱構造→楕円形柱穴側柱（梁行1間）構造という変遷が明らかになっている。現段階で楕円柱穴建物が確認されているのは上市町弓庄城跡<sup>1</sup>・砺波市増山遺跡<sup>2</sup>・福光町梅原胡摩堂遺跡であり、弓庄城跡のものは1段階古いものとして認識される。

なお、現在当財団が調査中の福岡町開幹大滝遺跡・小矢部市地崎遺跡において、関連する興味深い掘立柱建物例が検出されているので速報的に紹介しておき、考察の参考としたい。（第320図）

開幹大滝遺跡は戦国期の城である木舟城に関連した城下町と考えられ、ここでは道に面して長方形地割りが形成され、建物が配置される。建物は方形の豎穴状土坑を伴って、浅い柱穴（礎石・土台痕か）や円形（直径30cm～50cm および60cm～100cm）・楕円形（長軸50cm～100cm）柱穴列で構成され、背後には井戸や畠空間がみられる。建物構造は多くのバリエーションをもち、類縦柱・棟持柱+側柱・梁行1間・類縦梁行1間（梁方向の柱位置が揃わない）のほか、3・4基の柱穴が直線（I字）、L字・T字に並ぶものがある。柱穴がI・L・T字に並ぶ例は最も多く、後述する梅原胡摩堂遺跡の大型円形柱穴による建物例と類似する。現在検討中だが、棟支え柱もしくはそれに直接関与する柱のみが掘立柱として存在し、壁周りは土台もしくは簡素な礎石で構築されていたのではないかと思われる。時期は16世紀前半～16世紀末と考えられ、弓庄城跡と対比される。

地崎遺跡では2棟の近世掘立柱建物が確認されている。西地区建物の基礎部分は柱穴・礎石で構成され、長軸15.5m、短軸9mの中核屋と8.5m×6mの張り出し部分が想定されている。柱間装置は必ずしも正確な配置ではなく、間仕切的なものも含んでいるようである。中核屋内には埋め戻された豎穴状土坑があり、貼床そのものは確認されていないが土間と思われる。また、建物の土間と反対側には雨落ち溝があり、さらに建物を取り囲むように溝が巡っている。東地区建物は1間×3間の大型柱穴による中核屋がみられ、その外部に豎穴状土坑を含む小型の柱穴が巡る。屋敷地内北側には井戸があり、井戸の脇には数個あるが石列が認められた。豎穴状土坑は方形で、機能的には埋め戻されており、土間と想定される。両建物とも独自の屋敷空間を保持している良好な例で、近世民家「イエ」の確立したものとみることができる。時期は両建物とも17世紀後半～18世紀と推定される。

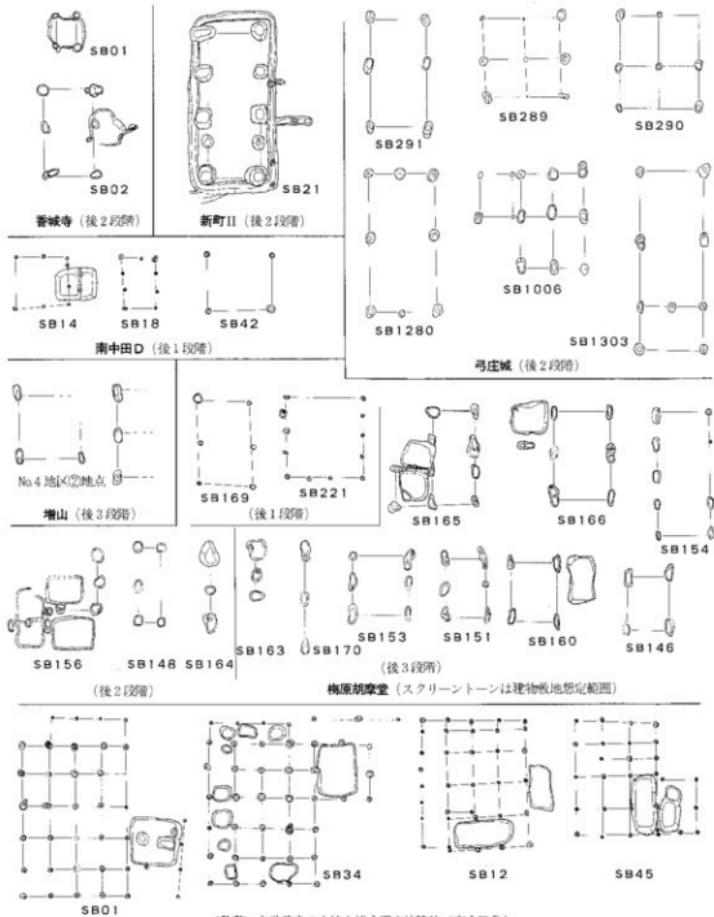
## 2 梅原胡摩堂遺跡の中世後半掘立柱建物（第321図）

梅原胡摩堂遺跡の中世後半の掘立柱建物は、切り合い・柱穴の形態などから3段階に捉えることができる。①円形柱穴（直径30cm～40cm程度）による建物が最も古く、復元できたものは少ないが、黒褐色の埋土上で形成され、側柱構造であるものが目立つ。柱間も中世前半の縦柱建物に比べて大きいものと小さいものが混在し、不規則になるようである（S B169・S B221など）。②大型円形柱穴（直径100cm前後）がこれに続き、3ないし4基が直線状に並ぶが、明確な方形建物ラインを構成しない例が多い。（S B148・S B156・S B164など）。これには柱穴列が豎穴状土坑と隣接するものがあり、両者の有機的関連が示唆される。先にあげた開幹大滝遺跡の例と同様に、一部の桁柱列のみが掘立柱として構築されるものと思われ。他の柱部分は礎石もしくは土台であったと考えている。③最も新しい段階の楕円柱穴建物は35棟が確認され、最大のもので1間×4間、最小のもので1間×1間である。面積は平均25m<sup>2</sup>で18m<sup>2</sup>に集中する。特徴として柱穴が楕円形であること、柱穴底部に礎石や、根巻きがみられるものが多いこと、梁行が縦して1間であること、柱間間隔（特に梁行）が広いことがあげられる。柱穴の長軸は80cm～185cmで、概ね100cm前後と160cm前後に大別できる。短軸は50cm～80cmに収まり、長軸比（長軸／短軸）は1.4～2.6になる。柱穴は底部に石臼片や偏平礎を置き、礎石にしたものや礎・越前焼瓦片で根巻きしたものがみられる。柱そのものは柱穴の規模に比して細く、直径15cm程度のものが遺存している。埋土は黄褐色シルトを多く混入し、前代の遺構とは明確に異なる。

出土する遺物は越中瀬戸・唐津・越前・信楽・伊万里などである。

また、大型円形・楕円柱穴建物には竪穴状土坑が付帯する例がみられる。S B165は中核屋からの張り出し（補助屋）部分に石列を伴う竪穴状土坑 S K5957・S K5958がある。S K5957は生活時には開き空間として機能しており、S K5958は埋め戻されている。石列はS K5958を埋め戻す際に構築され、上下2段でS K5957側に面揃えがなされる。S K5957側から見ることを意識したものであろう。これらのはかにS B166にS K5903・S K5991、S B160にS K6624、S B156にS K6292他が付随する可能性がある。

造構の年代だが、円形柱穴建物はおおむね15世紀～16世紀、大型円形柱穴建物は16世紀代、楕円柱穴建物は16世紀末～17世紀代と判断される。



第321図 中世後半から近世の掘立柱建物 (1:400)

### 3 構円柱穴建物について

#### (1) 出現の背景

構円柱穴建物に関わるいくつかの現象について、出現の背景を検討してみたい。

①梁行1間構造 これは構円形柱穴以前からすでに存在している形態である。県内では福光町香城寺遺跡<sup>注4</sup>、婦中町新町II遺跡<sup>注5</sup>で大型円形柱穴建物として指摘されており、梅原胡摩堂遺跡でも15世紀代には出現している。県外でも同様の傾向があり、梅原胡摩堂遺跡の構円柱穴建物はその発展形態と捉えることができる。この構造は棟支え柱が存在しないことを意味し、大梁の上に柾首または束を組んで棟木を支える構造に転換したことを示すものである。前代の総柱建物では直接柱の上に桁や棟木を架構する構造と考えられるが、この差は軸組・小屋組みに関わる部材の加工技術・緊結技術・計画的な木割術の浸透に契機があるのではないかと思われる。その結果、空間的な利用方法にも変化がみられたはずである。柱装置自体は梁を支えればよいのであるから、その本数が少なくなる分に自由空間は拡大し、畳や建具などの設置が自由にできるようになる。「3間2面」といった間面記法が古代から鎌倉時代に一般に用いられ、室町時代に入って徐々にみられなくなる現象については、「モヤ・ヒサシ」の小屋構造の変化によるものであることが建築史学的に指摘されている。従来はヒサシやマゴヒサシといった部分の柱位置が自由にならないために、内部空間が分断されてしまったり、奥行きの深い建物が作りにくいといった欠点があったが、屋根の上にさらに屋根を組み上げる大屋根形式の導入や、長い梁を用いて母屋（モヤ）と下屋（ヒサシ）部分の梁を一体化することでその解消を図ったとされる。考古学的には梁行1間化という現象として対応できるのではないだろうか。ただし平面的には遺構上にみられる中核屋＝母屋とは単純に考えられず、梁と桁を入れ替えて考えてみる必要もある。この解釈については土台建物のあり方を踏まえて考えてみたい。

②柱穴規模の拡大 これは梁行が1間になることと密接な関係にあることが看取される。ただし、梁行1間の建物全てが大きい柱穴をもつわけではなく、初期のものには従来規模のものがみられる。拡大の背景としていくつかの可能性を考えてみた。まず小屋組と軸組構造の分離に伴い掘立柱が建物の中核的な柱（上屋柱）に限られ、柱一つにかかる屋根の重量が増大した結果とするもの。ただし、この場合構円柱穴建物に遺存している柱根は必ずしも太くはないことを付記しておかなくてはならない。もう一つには桁柱列が中世総柱建物よりも整然とした直線をなすことから、柱位置の細かな調整が必要な構造であり、その調整余裕を作り出すためというもの。一般集落への畳の導入は江戸時代に入ってからであろうが、間取りを意識した企画性の導入と関連性があるのかもしれない。

③構円形柱穴 類例は少なく極めて地域的に限定された建築技術であるといえる。特定の集團による工法や脊・道具の違いに起因するのではないかという予察に止めておきたい。

④建物面積の縮小 構円柱穴建物の面積をみると、前代の総柱建物に比べて縮小する結果となる。総柱建物の面積は時代が下がるにつれて徐々に縮小する傾向にあるとはいえる、平均で50m<sup>2</sup>ほどはあるのが通例である。しかし、当遺跡の構円柱穴建物は平均で25m<sup>2</sup>ほどにしかならない。これは建物規模が縮小した結果と判断して良いのだろうか。ここで注意しなければならないのは構円柱穴建物の場合にはいわゆる補助屋（廂）と想定される柱列がない点である。建物の補助屋（廂）空間を利用するという概念が前代からある以上、その使用が断絶したとは考えにくい。構円柱穴で構成される中核屋部分で主体的に上屋（屋根）構造を支え、補助屋空間はこの外部に造構として残されない形で存在していたと考えてみたい。そのアプローチは次に述べる。

⑤竪穴状土坑 明瞭ではないが竪穴状土坑は構円柱穴建物の付近に多く確認されるのは前述した通

りである。数例ではあるが明確に建物に伴う例も存在している。また、土坑と建物は多くの場合構成方位が類似し、切り合い関係にあるものは少ない。さらに、土坑より出土する遺物は建物と時期的に余り差異がない。これより建物と土坑が極めて密接な関係にあったと認識すれば、建物外に近接する土坑は建物敷地内に取り込まれた土坑とみることが可能である。このあり方は楕円柱穴建物に限らず、大型円形柱穴の場合も同様である。他遺跡の類例では開封大滻遺跡で柱列の外部に土坑が確実に伴う例がみられるほか、地崎遺跡の東地区建物で梁行1間の中核屋外部に土坑を伴っている。また、中世前半の総柱建物に目を転じてみると、県内では建物内部に竪穴状土坑が取り込まれている例がかなりの数に上ることが指摘できる。当遺跡においても中世前半の総柱掘立柱建物に伴う例が数例みられる。特に多くみられた富山市南中田D遺跡ではこの土坑について、炊事場・工房（作業場）として認識したことがあるが、少なくとも県内において建物内部に作業場的空間を土坑として確保する伝統があつたといえる。建物の構造が変化したとはいえ、こうした空間の確保が継続していたと考えてもおかしくはないだろう。なお、竪穴状土坑は埋土のバタンから数種類に分類でき、床面に礫状炭化物が堆積するものや、貼床をもつもの、埋め戻されたものなどがみられる。<sup>87</sup> 分類の詳細についてここでは言及しないことにするが、現段階までの検討によれば、総柱建物に伴う土坑と楕円柱穴建物付近に存在する土坑にはバタンの差違は認められるものの、性格として顕著な違いは認められない。反対に明らかに単独存在と認識できる例は極めて少なく、性格づけもできない。

以上のことから、楕円柱穴建物付近に存在する土坑は建物に付随するものであり、土坑を含んだ空間を建物敷地として認識すべきであることが指摘できる。先に挙げた建物面積についても楕円柱穴建物の規模計測値は実像ではないといえ、土坑を含んだ敷地で面積を計測すれば前半のものと大差なくなることはいうまでもない。なお、建物S B165はその認識を強くする例であり、付帯土坑は新潟県北方文化博物館の伊藤家蔵に類似し、深い掘り込みと石垣を伴う形態に特徴がある。

## （2）歴史的背景

楕円柱穴建物のあり方について、簡単にではあるが歴史的な背景から考えてみたい。現段階では上市町弓庄跡の例が最も古く、弓庄城は上杉方に与した土居氏の居城として知られる。天正11年（1583）に織田方の佐々成政との攻防の末、和議・開城し、この時点での佐々成政の支配下に置かれる。一方増山遺跡は増山城の城下町として考えられており、増山城は元来神保氏の支城であり、一時上杉家の支配下となるが、天正9年（1581）には佐々成政に支配される。天正13年（1585）には佐々成政の秀吉への降伏により、前田利家の支配下となる。この楕円柱穴建物の存続年代だが、調査報告では前田家支配に移行した（1585年）後としており、楕円形柱穴建物は前田家の影響下で建築されたといえる。また、福岡町開封大滻遺跡は木舟城の城下町と考えられ、木舟城は佐々氏の拠点であったが天正13年（1585）に前田家の支配下になっている。

また、建築技術という視点からみた場合、中世末期以降には押領地大工や御用大工といった集団が統治者の支配下に置かれていたことが文献上に現れてくる。こういった大工集団は世襲制であることが多いようだが、例えば氷見の大窪大工は前田利家の御抱え大工として天正年間に屋敷地を与えられ、寺院や城の建築に従事したという。この大窪大工は元は前田利家の出身地尾張の出で、利家の諸国転戦の度に召し出されて各地に従軍し、兵舎・城砦・橋梁の建設部隊として活躍し、後世には需要に応じて民家建築にも従事したという。この他、井波や城端・富山・高岡にも同様な大工があり、普請とあれば城下町や城の建築に従事している。ある統治者のもと一定の地域において伝統的な建築技術が存在していた可能性は極めて高いといえる。こうしてみると梁行1間・楕円形柱穴という特殊性は大

工集団が関与していた可能性を強くするものである。弓庄城跡の場合は若干の遺構規模・形態に他遺跡のものと相違点がみられ、必ずしも同一集団とはいえないが、遺構の特殊性・限定性からその影響を与えるべく初源的な集団が存在した可能性がある。また、増山遺跡と梅原胡摩堂遺跡の場合には両遺跡に遺構・遺物では相違点を見つけることはほぼできない。梅原胡摩堂遺跡の性格が明確ではない以上、短絡的な結論は避けるべきだが、極めて密接な関係にある大工集団による所行であるといえよう。さらに開封大滻遺跡で規模・形態こそ異なるが楕円柱穴が確認されたことは興味深い。

#### 4 構造からみた中世後半以降の掘立柱建物変遷

県内における中世後半以降の掘立柱建物は柱穴・構造から3段階に分離でき、簡単に概観しておく。

**後1段階** 14世紀まで盛興する総柱形態の掘立柱建物は、15世紀に入ると遺構としては規模の縮小・桁柱間の短縮化、梁柱間の拡大化などの変化がみられ、円形柱穴による側柱形態（一部に梁行1間）の建物が目立つようになる。総柱形態と側柱形態の建物は規模に差違はなくなり、棟支え柱の存在が薄れる。（弓庄城跡・南中田D遺跡・梅原胡摩堂遺跡・白谷岡ノ城北遺跡）

**後2段階** 柱穴自体が規模を拡大し、大型の円形柱穴によって構成される。総柱形態はほとんどみられず、側柱が主体となり梁行1間建物が頻繁にみられる。また、16世紀代に入ると柱穴が大型円形のほかに楕円形を呈するものが出現する。その大部分は梁行1間で構成される。さらに並行して、必ずしも梁行が存在しない桁柱列中心のタイプも存在し、土台や礎石の併用が想定される。（弓庄城跡・香城寺遺跡・新町II遺跡・梅原胡摩堂遺跡・開封大滻遺跡）

**後3段階** 16世紀末から17世紀代になると、より企画性の強い梁行き1間の楕円柱穴建物が多くみられる。（増山遺跡・梅原胡摩堂遺跡）

梁行1間化の現象は小屋組構造の変化を表すものとして考えられ、母屋と下屋空間の明確な区別がなくなったことを示す。後1段階（15世紀）を境にして建物が新構造に移行していくと捉えることができるが、後1段階ではまだ総柱形態を残すものもあり、完全に移行したとはいえない。ほぼ完全に移行したと捉えられるのは後2段階からで、柱穴の規模が拡大し、検出される柱列が中核屋（身舎）部分のみを表していると思われる例が出現する。これは建物に礎石や土台が併用され始めたことを示す。さらに梁の通らないタイプがみられ、礎石や土台の併用に際して建築技術にバラエティがあることがわかる。後3段階になると構造上の企画性が強く、ある一定の建築基準の元に構築されていることが想定される。また、建物に礎石や土台が併用されているのはほぼ間違いなく、掘立柱は少なくとも18世紀まで使用されていることがわかる。

#### B 近世土台建物の動向

##### 1 県内の調査例

県内で近世に属する掘立柱構造以外の建物は発掘調査としてはほとんど例がない。現存する古民家では18世紀に遡る福岡町佐伯家などがみられるが、これらは全て礎石建てか土台建てである。この類の場合発掘調査ではほとんど痕跡として残らない可能性が強く、近世建物としての全容は把握できない。このような中でこれまでに近世建物に関連がありそうな遺構として、石列を伴う遺構が数例認められている。上市町館窪割遺跡では1列1段組の石列が確認されている。ここでは近世建築物の一部をなすものとして性格づけている。また、石列の北側は50cmほど掘られており、これを水舟などの施設と想定している。また、嬉中町蓮華寺遺跡では3.7mと8mの石列が2列平行して確認されている。ここでは「建物（群）を区画するもの」という性格を考えている。福野町寺家新屋敷跡では城館の内部に直線・コ字状の石列がみられ、最高で5段に組まれ、深さ50cmの土坑に伴っている。遺物は越

中瀬戸が出土しているが、段数が多いことから建物に直接関連する可能性は薄い。

近世建物の検出例は富山市南中田D遺跡に例があり（第322図）、石列を伴う長方形の土坑が確認されている（S X-6およびS X-4）。S X-6は8.7m×4.6m、深さ60cm、面積40m<sup>2</sup>の土坑で、内部に平行した石列が3列ある。石列は1段と2段のものがみられ、石列上面は地表面とほぼ同じ高さになる。土坑内部は埋め戻されており、その上面には約2m間隔で2間×2間の礎石状の偏平礎が認められる。また、土坑外部には直径5cm程度の礎を敷き並べた1.5m×4mのバラスがあり、これらを総合すると土台建物の一部を構成していると考えられる。なお、土坑の南側には乱れた土壤と礎の散乱がみられ、この部分を含んだ敷地を考える必要がある。また、S X-6の西側には同様に石列を伴った不整形の土坑がみられ（S X-4・S K-1086）、土台建物の一部を形成していた可能性がある。時期は17世紀以降である。

## 2 梅原胡摩堂遺跡の土台建物（第322図）

当遺跡で近世の建物跡として認識されたのはS B6390、S B6665、S B7101、S B8680である。S B6390は規模19.5m×16.5m、深さ50cm、面積320m<sup>2</sup>の豊穴状土坑を基本とし、東側に石列、西側北寄りと中央南間に貼床、西側外部にバラスを伴う。土坑底部は必ずしも平坦に掘られておらず、礎層の面まで掘り下げる目的としている。土坑は2層の埋め土で埋め戻され、特に下層は植物遺存体や礎を多く含んだ粘土質である。上層の埋め土上面は比較的平坦に整地され、遺構検出面より若干低い面を作る。石列は土坑東側縁辺部に上下2段組で長さ5mほどみられる。南側は崩れていたので実際は倍ほどの長さがあったものと思われる。石列の上面は遺構検出面より若干高い位置にあり、面は内側に揃えられている。また、石列を構築する際に掘られたと思われる土坑が外部にみられる。西北側の貼床は黄褐色砂質シルトで方形状を呈し、内部に向かって徐々に希薄になる。壁際ではバラスに向かって立ち上がり、遺構検出面よりも上位になる。貼床面は極めて凸凹な面をなし、比較的堅く縮まっている。中央南の貼床は同様に黄褐色の土で面を形成しているが、さほど縮まっておらず上面も比較的平坦である。西側のバラスは下部に掘形をもつて、遺構検出面にのみみられる。直径2cm～3cm程度の礎が2m×6mの範囲に広がる。

S B6665は規模20m×7.5m、面積138m<sup>2</sup>の土坑で北側は方形の貼床がみられ、この境と南側縁に石列がみられる。貼床境の石列は遺存が悪く明確ではなかったが、南端の石列は1段で直線を形成している。土坑そのものは西側が浅く10cm程度で、東側は50cmほど掘られる。深い場所は黒色系の埋土で埋め戻され、上面は平坦面を形成する。貼床は厚さ1cm程度の黄褐色砂質シルトで構築され、皿状を呈する。

S B7101は規模15m×13m、深さ50cm、面積約195m<sup>2</sup>の不整形の土坑で、内部に3条の石列と貼床、バラスが認められた。東西方向の石列は外部に向けて面が揃えられ、南北方向の石列は内部に向けて面が揃えられる。石列内部は埋め戻され、内部には何カ所かに掘り残された丘がみられるのが特徴である。貼床は石列間の内部にみられ、広範囲にわたる。バラスは東側と南側にみられる。また、井戸が伴う可能性がある。

S B8680はその全容はわからないが、土坑内部に石列や貼床状盛り土、バラスが認められている。土坑は不整形で掘られ、コ字状に掘り残し部分がある。この土坑の場合は埋め戻しあほとんどない。石列は土坑の掘り込み境の直線状のものと、土坑内部のコ字状（ロ字？）のものがある。土坑境の石列は1ないし2列あり、内部に向いて面が揃えられる。コ字状の石列は内部に向いて面が揃えられ、内部は盛り土されて貼床状に堅く縮まっている。また、土坑中央の掘り残し部分には直径数cm程度の

小礫のバラスがあり、土坑南側にはやや大きめの礫によるバラスがある。

以上の遺構からは17世紀前半を中心とする遺物が整地土中から出土する。しかし他の遺構との切り合ひ関係から遺構の時期は17世紀末から18世紀前半と考えておきたい。

### 3 土台建物としての認定

以上にあげた大型の豎穴状土坑を土台建物として認識するにあたって、まず何を基準にしているかについて明確にしておかなくてはならないだろう。発掘調査時においては石列の有無に基準をもつことから始まつたのだが、類例が増えるにつれて構造に一種の規則性があることに気づいた。まず石列は大型の豎穴の縁辺部に伴われること、豎穴が埋め戻され整地されていること、遺構の構造ラインが不規則ではあるが直線的であること、異質の土を盛り立てて堅く締められた貼床をもつこと、土坑の外部に小礫を敷き並べたバラスがあることである。必ずしも全てがセットとして検出されるわけではないが、これらのあり方や配置に一致する点が多い。このことからこれらの豎穴状土坑がある規則性に基づいて計画されたものであり、建物痕跡の可能性が高いという推測がおこなわれた。また、出土する土器が近世に属するものであるという点もこれを後押すする材料となった。

以上の基準について実際に建物痕跡としてどのように解釈するか、梅原胡摩堂遺跡の4例と南中田D遺跡の例を対象に遺構の個々の内部構造について検証をおこなっていくことにしたい。

#### (1) 石列

近世民家の観察では石列がみられる場合として、敷地の整地盛り土を巡る石垣、土間境縁の基礎、建物外壁や東柱を支える土台の基礎、縁側の下にみられる風除け、建物敷地と庭などの境界、囲炉裏の基礎である。これらは主として2通りの用途があるといえる。一つは土台（転ばし根太）などの諸施設を支える基礎として、もう一つは空間を分ける境界石列としてである。

石列は5遺構11例みられ、構築方法には数種がみられる。まず、1段で組まれたものと上下2段に重ねられたものがみられ、これは単純に土坑の深さに影響されている。石列の上面は少なくとも遺構検出面と同じ高さにあり、掘形が深いほど2段になる。また、石は河原転礫を用いるが長軸方向で横並びにするものと縱並びにするものがある。ほとんどは縱置きにしており、これは面揃えを行いやすいようにしたためであろう。また、石列の上面は現状では必ずしも平坦面を形成せず、面揃えは片側側面に施され、ほとんどが石の露出する側に向けて行われる。また、面揃えされていない側は埋め戻されている。直線状・L字の石列は貼床の対辺側にあることが多く、土坑の縁辺部に形成される。SB7101の場合は石列の配置から土台の基礎となる東石であったと考えられるが、土坑の縁辺に構築される他の例は必ずしも上坑全域にみられるわけではなく、建物土台基礎としての様相は強くない。簡素な基礎もしくは構造境界をあらわす程度のものであろう。ただしSB6665の貼床境の石列はいうまでもなく土間境縁の基礎（縁束石）と考えられる。なお、SB8680のコ字状石列は石列内部が機能しているもので、近世・近現代建物に類似するものがあり、囲炉裏跡と思われる。<sup>11</sup>

#### (2) 貼床

貼床は4遺構5例ある。主として黄褐色系のシルトで構築され、遺存状態の良いものでは厚さ2cm程度で、上面は激しい凹凸がみられる。貼床部分は一旦土坑状に掘り下げられ、若干皿状に埋め戻しされた後に貼られるのが多いようである。上面はかなり堅く締まってはいるが、どの貼床も漆喰や塗などによる明瞭な痕跡は確認されていない。面積は一様ではなく、平面形は方形もしくは長方形を呈する。これらは土間もしくは廐として認識しているのだが、実際の民家例においても土坑状に掘り下げられている土間や廐は少なくなく一致する。ただし、肝煎りなどの上層階級住宅では、土壇上に築

かれているため土間等が地面上に残る可能性は低いといえる。

#### (3) バラス

バラスは4遺構6例みられ、概ね直径1cm～5cm程度の小礫で構成される。位置的には土坑外に張り出るものが多い。また、貼床側に位置するものが多く、石列と対辺にあることが多いようである。特に貼床と近接する例の場合は入り口・玄関などの部分に相当する可能性が高い。

#### (4) 埋め戻し整地

埋め戻し整地がみられる土坑は5遺構5例ある。特に下部の埋土は黒褐色粘土質シルトや植物遺存体を含むものが目立ち、上位には比較的安定したシルトが平坦に埋め戻される。これは建物面の整地作業の一種として理解できるが、下部の埋土については土坑やその周辺の表土整地の土礫がまず投入されていることを示すと思われる。また、埋め戻し完了面は遺構検出面より若干低い程度で、従って土坑は建物敷地の土壤整地を目的とした天地返し作業に関連したものと考えられ、土坑の深さには特に意味はないものと判断できる。土坑平面形については梅原胡摩堂遺跡の例ではほぼ建物敷地を表すと考えられるが、建物敷地の整地の必要条件によっては必ずしも全面に行われるものではなかっただろう。また、S B7101やS B8680でみられた土坑内の掘り残された部分は建物内で直接地面が露出していた部分に相当する可能性がある。

#### (5) 規模・配置

土坑面積では40m<sup>2</sup>、135m<sup>2</sup>、195m<sup>2</sup>、320m<sup>2</sup>とまちまちである。富山県の古民家の面積では広間Ⅰ型でも100m<sup>2</sup>前後はあり、広間Ⅲ型ともなると400m<sup>2</sup>近いものまでみられる。<sup>124</sup> 100m<sup>2</sup>を超す土坑例について、掘立柱建物の面積から考えると規模が大きすぎる感があるが、上記の民家例からも特に問題はないだろう。しかし、南中田D遺跡例では40m<sup>2</sup>と極めて小型であり、整地土坑が必ずしも敷地を反映していない例として考えるべきであろう。

建物は近隣に関連した遺構を伴うものはない。中世末期の建物や溝を完全に無視した位置にあり、何棟かがセットをなす状況もみられない。明らかに「イエ」が独立した段階といえ、一家屋の敷地が単独で存在している状況を看取できる。

#### (6) 軸組構造

礎石状の円礫がみられた南中田D例を除けばいずれも柱痕跡や建築材は確認されていない。石列上面に柱が建立された可能性もあるが、S B7101以外は石列のあり方から可能性は薄い。可能性として考えられるのは、礎石が抜き取られたか、角材などを根太にした土台建て構造であったかだが、遺構としては根拠に乏しい。全くの推論の域をでないが、一つ興味深い例がある。それはB-2地区に江戸時代後半からあったと目される以遠寺跡があるが、ここでは数個の方柱状の切石が出土している。移転した際に建物土台として用いられていたもの一部が廃棄されたものであろう。また、付近の民家を観察すると当地域では同様の切石を並べ、その上に根太を置く例がみられる。切石の場合礎石と異なり転用が利きやすく、建物の廃棄とともに持ち去られる場合が多いと考えられる。ここでは予察として切石上に建てられた土台建物の可能性も考えておきたい。

### 4 近世建物（民家）としての解釈

#### (1) 間取り（第323・324図）

「富山県の民家」（1980）の方式に習って先にあげた5例の建物例を間取りという視点から考えてみる。富山県の古民家は17世紀に遡る例はほとんどなく、18世紀以降のものになるが、広間を中心とした間取りと構造に特徴があるという。いわゆる広間型が広範にわたってみられ、規模の大きさから広

間Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ型に分類されている。<sup>註15</sup> 広間Ⅰ型が最も初源的な形態とされ、土間・広間・座敷の3間がある。Ⅱ・Ⅲ型はこの発展形で広間の取り方などに違いがある。ここで多くの問題を抱えてはいるが研究の契機になるものと考え、検出された遺構について復元を試みたい（第323図）。S B6665は広間Ⅰ型と認識できるもので、土間（ニワ）は半分である。石列はトコやエンに相当する。入り口は北もしくは東である。S B7101はニワの位置に不安は残るが、ヒロマ・ザシキの食い違いを想定できる。石列はやはりエン・トコに位置する。入り口は北もしくは西になる。S B6390は復元が困難だが、北東の貼床が最も堅固面をもつことからニワと想定し、南の貼床はカッテ・ダイドコロ・チャノマなどに相当させた。しかし、やや軟弱な貼床であることから底であった可能性も捨てきれない。石列は同様にトコやエン部分になる。入り口は北もしくは西になる。これらの復元から石列は座敷の奥にあたるトコ・エンに位置することが考えられ、特に縁は僧侶などが出入りする裏口的な要素も合わせ持っていることから、石列がその景観や機能を果たしていると考えることができる。また、井戸はニワには位置せず、カッテ・ダイドコロ・チャノマ部分に位置する結果になった。

## （2）上台建物の位置づけ

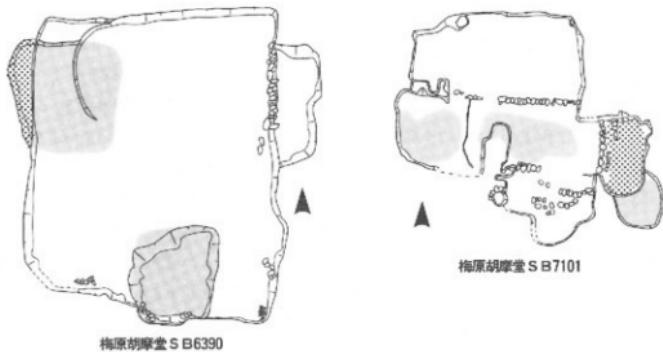
近世民家は江戸時代の幕開けとともに生産技術の革新・生産力の向上・生活様式の変化・政治的統治関係の変化・経済的流通の変化によって成立していくとされる。それは上流階級層の「イエ」が様々な規制の枠から抜けだし、個性的な発展を遂げることを意味する。県内に現存する近世古民家は全てが礎石や土台によって構築されているもので、中世掘立柱建物との直接的な系譜を追いかけることは困難である。現存する例が比較的上流階級層の家屋と考えられる点もあるが、近世の一般民家が中世掘立柱建物と全く別系統で発展したとは考えられない。そこで近世古民家と現段階で確認されている近世建物跡の例からあり方を探してみたい。

富山県の民家は「ヒロマ」部分が構造的な中核であり、他の部屋はヒロマにもたせかけるように継ぎ足してゆく<sup>註16</sup>のが特徴であり、ヒロマを中心とする「単位構造」を複数連続させることによって平面形の拡大が可能になる。これは軸組構造と小屋組構造が分離して構築されることをも意味し、小屋組に直接関わる「大黒柱」と間仕切りに関わる柱が異なった要素で用いられることを示す。すなわち間仕切りに関わる土台の使用が積極的に受け入れられる基盤であると理解できる。

遺構として検出された例はいずれも17世紀後半～18世紀と考えられ、近世古民家でも最も古い一群と比較される。軸組・小屋組構造についての比較はできないが、平面積では100m<sup>2</sup>を超す例が多く、前代の遺構と比較しても近世民家の色合いが濃いといえる。また、整地を行なうという点についても前代の建物遺構とは全く異なる一面を持つ。近世民家では江戸時代後半になると土壤を築いた上に建物が構築される例が増え、整地行為がより上位に移行して行われていることがわかる。この意味からも整地行為は近世民家の特徴として捉え得るものであり、地面に痕跡として残る例はより古相の整地行為として考えられる。土台を用いる例としては中世末からの掘立柱建物に可能性があり、土台の普及が近世民家成立と同時期ではないと考えられるが、具体的な土台の使用が判明すれば意外と異なった使用方法であることが考えられる。このことから今回検出された土台建物は極めて近世民家の内容であり、こうした構造が17世紀後半～18世紀には存在していたことを示す。ただし、遺構の付近には以連寺<sup>註17</sup>という寺が存在していたこともあり、建物の性格は若干特殊なものであったかもしれない、地崎遺跡の同年代の建物が掘立柱構造であることと比較しなければならないだろう。

## C 中世後半から近世の建物の連続性

中世後半から近世の掘立柱建物は15世紀を境に圓柱化・梁行1間化という現象で捉えられ、小屋組



梅原胡摩堂 S B7101

梅原胡摩堂 S B6390



梅原胡摩堂 S B8680

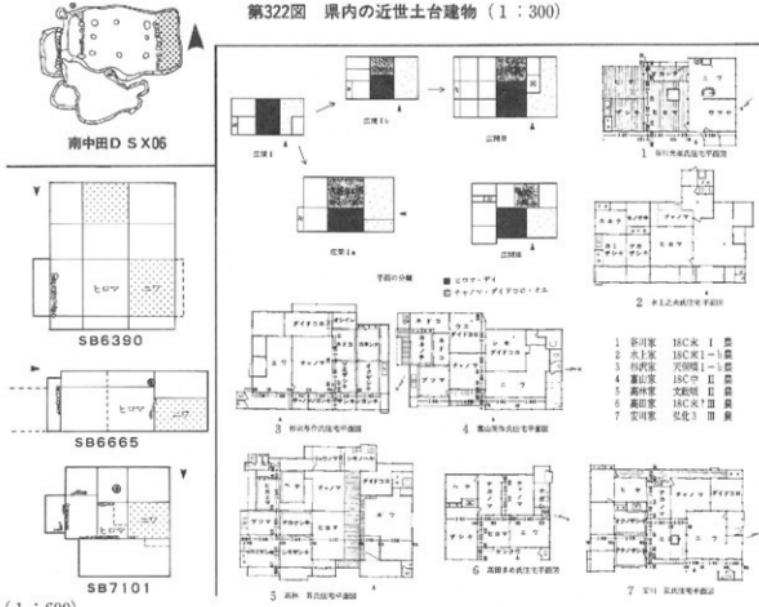
梅原胡摩堂 S B6665

パラス

貼床

10m

第322図 県内の近世土台建物 (1 : 300)



(1 : 600)

第323図 推定復元間取図

第324図 富山県の民家例 (富山県の民家より抜粋) (1 : 600)

架構技術の変革によるものであることが想定され、あわせて土台を併用するタイプの出現が指摘できる。こうした掘立柱構造の建物は時期的には18世紀まで存続していたことがわかっている。一方、近世の土台建物は近世民家として認識できるもので、17世紀後半から存在が確認できる。さて、問題はこの両者を如何につなぐかということであるが、地崎遺跡の掘立柱建物例（17世紀後半～18世紀）がこの重要な鍵を握っていると考えている。地崎遺跡の例は掘立柱を使用する最も新しい例になり、柱は中核屋と土間を含む補助屋部分が明瞭に分かれている。特に西地区建物は1間×3間の中核屋部分が大きい掘形をもち、近世の楕円柱穴建物と構造上近似した内容を示している。これは楕円柱穴建物からの連続的な発展形と捉えられる。しかし、反対にこの建物は近世民家の普及と時期がオーバーラップするものであり、建物規模では梅原胡麻堂遺跡の土台建物と遜色ない。視点を変えて間取りや上屋構造の復元を考えた時、実は中核屋と捉えていた1間×3間の部分が民家のヒロマ・カッテに相当する可能性がある。富山県の民家の場合特にヒロマ通りの柱が太く中核になる様相があり、広間I型の谷川光雄氏住宅例（第324図）のようにヒロマ・オカッテ部分が1間×2間に抽出できるものがある。この場合造構の中核屋は建物中核の単位構造にあたり、造構上で梁と捉えていた部分は桁に相当する。土間部分は隣接する単位構造内に位置し、造構上では外部に突出したかのように見えるわけである。もし、この推定が当たっているとすると、この建物と類似する楕円柱穴建物も同様の解釈が可能になり、近世民家の構造成立の時期は17世紀代に遡ることになる。後2段階から後3段階への移行について企画性が強くなることが看取されていたが、実はこの変化に軸組構造と小屋組構造の分離（近世民家の成立）という現象が隠されているかもしれない。15世紀からみられる梁行1間建物については、総柱構造から側柱構造化という段階的な変化の中でみられることから、この解釈が適応できるとは考えにくく、途中のある段階でこうした大きな転換があった可能性がある。あとは建築学的見地から掘立柱と土台の併用がどのような形態として存在しうるかという検証が必要になる。

なお、もう一つの視点として竪穴状土坑（土間）があり、中世の竪穴状土坑と近世建物の土間の系譜を検証する方法である。これについては問題提起にとどめておき、いづれ再論することにしたい。

以上、大雑把な推論を重ねてきたが、中世的な總柱構造から近世民家の変遷はより具体的な事例の增加によって検証されていくことと思う。そのためには、中世後半から近世の建物について土坑や閑連施設を含んだ有機的な関連で建物敷地をとらえる視点が必要であり、反対に建築学的な視点から柔軟な解釈を導入する必要があると考えている。是非諸氏の御助言、御叱責を頂きたい。（河西健二）

注1 上市町教育委員会 1981～1985 「弓庄城跡 第1次～5次緊急発掘調査概要」

注2 研波市教育委員会・研波市郷土資料館 1991 「増山城跡調査報告書」

注3 富山県文部省興財團 1994 「埋蔵文化財年報(5)」

注4 福光町教育委員会 1982 「香城城跡調査の調査」

注5 姨川町教育委員会 1986 「新町II遺跡の調査」

注6 石田潤一郎 1990 「星根のはなし」 鶴島出版会 伊藤爾爾 1958 「中世住居史」 東京大学出版社 宮澤智士 1983 「近世民家の地域的特色」 「庶民日本技術の第7巻建築」 日本評論社 清水謙 1990 「日本の美術4 民家と町並 関東・中部」 宝文堂 太田博太郎 1947 「日本建築史序説」 彰国社を参考にした。

注7 富山県埋蔵文化財センター 1990 「南中田D遺跡発掘調査報告書」

注8 河西健二 1993 「越中における様相」 第6回北陸中世土器研究会 中世北陸の家・厨敷・暮らしより「北陸中世土器研究会」

注9 高瀬保 橋本方雄 1983 「第7章 第8節 墓人と諸商売 一、大工」 「富山県史 通史編 IV近世下」 富山県

注10 上市町教育委員会 1983 「7 郡御割道跡」「弓庄城跡 第3次緊急発掘調査概要」

注11 姪川町教育委員会 1984 「遺構寺遺跡の調査」

注12 福野町教育委員会 1989 「守家新堀敷跡II」

注13 (財)岩手県埋蔵文化財センター 1981 「町場II遺跡」「御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告」 この他第木千年家にもみられる。

注14 注15 注16 富山県教育委員会 1970 「富山県の民家 (民家緊急調査報告書録録)」 同 1980 「富山県の民家 (富山県民家緊急調査報告書)」

注17 泰農園立文化財研究所 1985 「日本における近世民家 (農家) の系統的発展」

建物軸組の構造的な分類のための概念として単位構造という用語を用いており、これを準用した。

注18 墓物内部が掘り込まれ、上屋柱礎石部分が側柱礎石より低くなる例 (愛知215・愛知323) がある。P112, 113

## 4 井 戸

12世紀半ばから18世紀にいたる集落址である梅原胡摩堂遺跡では、多くの建物・溝・土坑が検出されている。しかし、建物は別として土坑においては性格のわかるものは少ない。その土坑の範疇の中で唯一性格の解り得るものとして井戸がある。当遺跡では中世から近世の井戸と推定する土坑を約370基検出した（第325図）。ここでは、生活に密着した遺構である井戸を視点として、県内の集落址と比較しながら当時の建物との関係を検討したいと考える。併せて、検出した井戸という遺構の再検討も試みたい。以下、時期別に例を挙げて概観していく。なお、遺構の位置関係については遺構全体図を参照して頂きたい。また、ここで使用する井戸の分類は宇野氏の分類による。

### A 中世前期

遺跡において中世前期の建物が分布する範囲は、調査区の北側を中心とする約18,000m<sup>2</sup>である。南に行くに従い時期は新しくなる。遺物から中世前期に比定される井戸は30基を数え、その分布は建物の分布範囲よりやや南下する。単純に分布密度を計算すると、600m<sup>2</sup>に1基の割合となる。井戸の種類には、素掘井戸・木組井戸があり、木組井戸の中には縦板組・横板組・曲物積上げのものがある。井戸側が残るものは8例のみで、他はすべて素掘りである。残存する井戸側も一部に過ぎない。井戸からの遺物の出土量は一般的に少ないと、木製品などを伴う比較的量の多い井戸は3例ある。

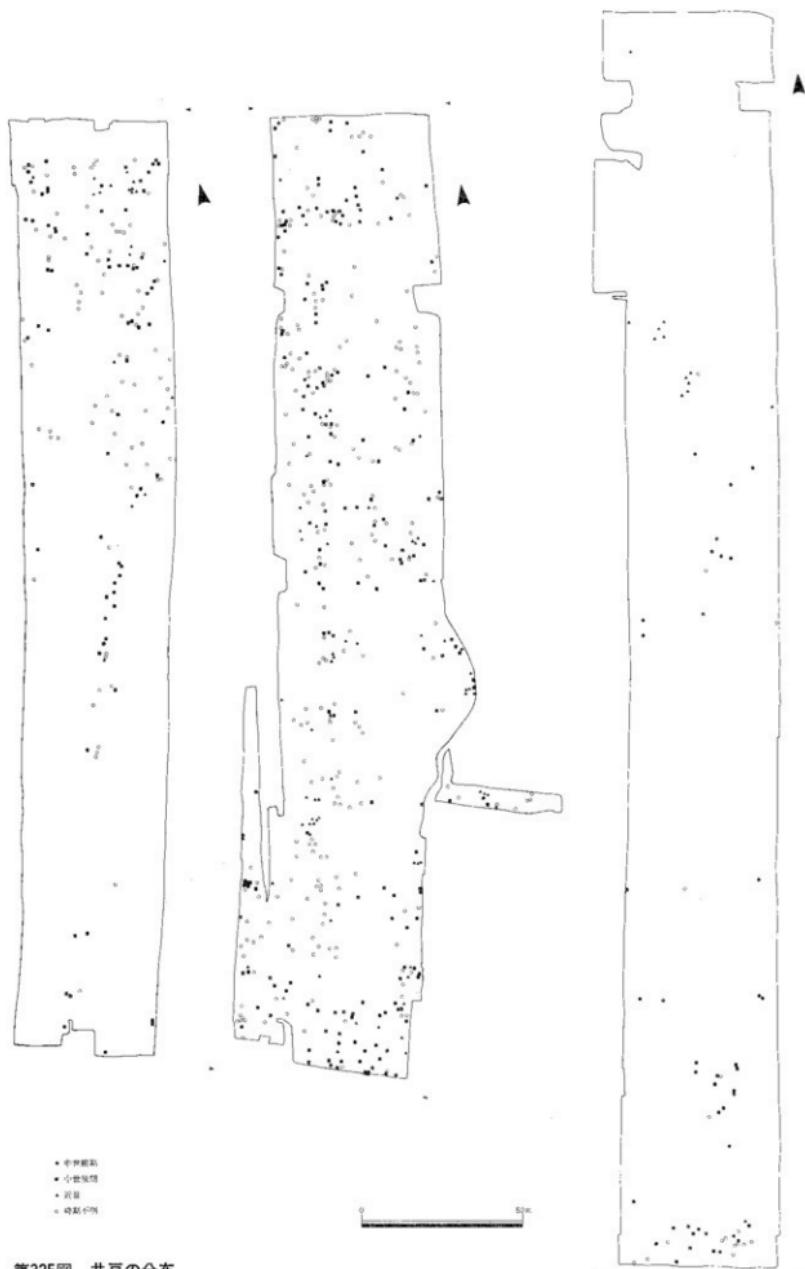
遺跡の北端からS D701までは、約4,500m<sup>2</sup>の中に建物が37棟復元できる。建物の時期は大きく12世紀後半～13世紀と13世紀～14世紀に分かれるが、この範囲の中には井戸は1基も検出されなかった。水溜の可能性がある土坑も、断面が逆円錐形状の1基のみである。自然河川であるS D701がこの南を西から北へ北流するため生活用水は十分であったと推察できるが、これを飲用にしていたかは定かではない。建物に井戸が伴わない一つの例である。

S D701とS D2453の間では、約4,000m<sup>2</sup>の範囲に21棟の建物が復元される。時期のわかる建物は、大きく13世紀と14世紀に分かれ、13世紀のものは12棟、14世紀のものは5棟である。井戸は6基検出され、時期は13世紀が1基、14世紀が5基である。この地区の主体の時期はS D1250やS D1252によって方形に区画される13世紀であり、この時期にはまだ井戸は少ない。しかし、14世紀になるとS D1250に重複して、時期不明の1基を含め6基の井戸が検出されている。明かに溝より新しい井戸もあるが、直径約250cmの大型の2基は、井戸というよりは水溜として機能した可能性がある。

S D2453とS D2451・S D2203に囲まれた地区は、面積約1,400m<sup>2</sup>、13世紀～14世紀の建物が17棟検出された。当該期の井戸は、素掘井戸1基と方形の大型の木組井戸2基が検出された。2基の木組井戸は南北に並立し、規模も似ている。建物群とはやや離れた土坑群の中にあり、1基は覆屋を伴う。素掘井戸は建物と重複しており、建物の内部に存在していた可能性もある。

S D2203からS D3425の南までは、約4,500m<sup>2</sup>に36棟の建物を検出し、並んだ方形区画のS D3425が掘削される前の建物と以後の建物に分けられる。このブロックは前期と後期の遺構が共存しているので、13世紀～15世紀の遺構が検出されている。中世前期の井戸は7基検出し、13世紀と14世紀に分けられる。これに中世後期に属する10基が加わる。S D3425の区画内では中世前期とした井戸が3基検出されているが、S D3425より古い時期の建物に伴うものである。

中世前期の建物分布範囲外であるX265～320の範囲では、13基の井戸<sup>(1)</sup>が検出されている。井戸の時期を出土遺物で決定しているため当該期の遺構であるかはやや問題が残る。また、横板組や曲物積上げなどの井戸側が残るものもあるが、曲物積上げ井戸としたもののかには漁上に炭化物を多く含み、中層中央から割れた状態ではほぼ完形の中世土器が出土したものがあり、井戸以外の遺構の可能性が



第325図 井戸の分布

大きい。これらの性格は建物が復元できなかったのか、灌漑用などの単独井戸であるかは不明である。

このように見てみると、中世前期は建物の棟数に対して井戸の数が少ないと明かである。検出した建物棟数124棟を、検出した井戸<sup>i</sup>の数で単純に割ると、約4棟に1基という計算になる。特に13世紀までが少なく、当時はまだ飲料水を得るために井戸を掘削することが一般的でなかったことが窺われる。14世紀になるとやや増えてくるが、この段階でもまだ建物そのものに伴うものではない。

この時期の県内の集落址を見ると、同様な傾向が窺われ、平均すると建物5棟に1棟の割合となる(第18表)。富山県総合運動公園内遺跡群のように、6遺跡で12世紀後半~14世紀の建物を100棟近く検出しているが、井戸が1基しか検出されないという例もある。また、一方で小倉中稻遺跡では、溝で囲まれた建物1棟と井戸1基がセットで検出される例もある。立地や建物の性格など細かく見れば問題があるが、この時期では県内においても、井戸の掘削が一般的でないことが言え、梅原胡摩堂遺跡では14世紀になると増加の兆しが見えるようである。

## B 中世後期

この時期の井戸<sup>i</sup>はS D3425以南で検出される。面積約38,000m<sup>2</sup>には一面に検出される。検出した井戸<sup>i</sup>と推定する遺構は240基である。単純に計算すれば約160m<sup>2</sup>に1基となり、密度の濃い所では、約20m<sup>2</sup>に1基という所もある。全く遺物が出土しなかった井戸<sup>i</sup>の大半もこの時期のものと考えており、割合はこれ以上となる。井戸<sup>i</sup>の種類は井戸側がしっかり残るものは皆無で、覆土の堆積から曲物積上げと想定できるものが数例と、一部石組を残すものが1例あるのみで、ほとんどが素掘井戸<sup>i</sup>の形態である。遺物には、土器の他に漆器・箸などの木製品、石臼・茶臼などの石製品があり、鉄滓や鎧先などが出土した井戸もある。前期に比べて総体的に遺物量が多い。特徴的なものとして、舟形が出土したもの、中央に竹を差し立てたものがあり、廃棄時の祭祀が行われたことがわかるものもある。

S D3425の区画内面積約1,200m<sup>2</sup>の中では8基検出した。建物は15世紀の側柱のものを2棟検出した。建物とこれに伴うと考える方形の土坑群は東側に集中し、井戸もこれらと同様の分布を成す。特に土坑に近接し、密接な関係をもつと考える。

伝安楽寺周辺から県道・金沢井波線までの範囲は中世後期と近世の遺構が混在して密集する所である。中世後期の壠状の大溝によって区画されるこの面積約16,500m<sup>2</sup>の範囲では、30棟の側柱建物が復元でき、井戸<sup>i</sup>176基を検出した。単純に割れば93m<sup>2</sup>に1基の割合となる。この時期になると、建物は掘立柱建物だけではなく、竪穴状土坑が伴うため、掘立柱建物の棟数だけでは建物との関係は探れない。まして、伝安楽寺周辺は遺構密度が非常に高い割には、掘立柱建物は少なく、竪穴状土坑の検出が多い。羽口・堵塞性などが出土することから、鉄物師などの職人の建物など作業場的な性格の建物の存在も考えねばなるまい。

県道金沢・井波線の南においては、道に沿って西は方形区画のS D9301に囲まれた屋敷地、道を挟んだ北側は、近世遺構が重複して複雑になっているが、道に沿って浅い溝に区画された建物が並んでいたと推定する。S D9301の区画内には当期の井戸が3基検出され、貼床状の竪穴状土坑に伴う井戸が1基ある。道の東側はS D10102までの範囲で、掘立柱建物が8棟、井戸が41基検出され、竪穴状土坑に伴うものが2例ある。

遺跡南端からX100までは、ほとんどの遺構が中世後期のものであるが、その分布は散漫である。西側は、壠状の大溝(S D10101)によって区画された屋敷地が存在するが、端にあたるためか遺構はまばらである。13棟の建物を復元したが、どれも小規模で時期は16世紀または16世紀~17世紀である。X50~100の範囲に関しては、上面が削平を受けているため井戸<sup>i</sup>のような深い遺構のみが遺存したと考

えられ、その分布が直線上に並ぶのは、帶水層を追って掘削しているためであろうか。遺跡の南端は建物がやまとまって検出された所で、建物が10棟、それに対する井戸の数は8基である。建物の周囲には1~2基の井戸が見られるが、堅穴状土坑は伴わない。

15世紀になると、掘立柱建物・堅穴状土坑・井戸<sup>14</sup>がセットで建物を構成するようである。建物の数そのものが戸数を示すわけではないので、井戸<sup>14</sup>が共同井戸から各戸の井戸をもつようになったとは単純には言えないが、共有する建物数は減り、前期に比べて井戸を掘ることが一般的になったということは言える。また、建物に伴う堅穴状土坑内に井戸が共有する例が見られることから、建物内部の土間状の部分に井戸を造るようになったことがわかる。一方で、このように建物に伴う井戸とは別に、井戸だけが散在するブロックも存在する。これらの井戸は、一群となって集中して検出されることもあるが、中世前期と同様性格は不明である。総体的に、当遺跡の時期の素掘井戸の検出数はやや異常と考えるべきで、井戸以外の施設、例えば便所・ごみ穴などの用途も考えねばなるまい。そうでなければ、井戸戸数の土坑を多く必要とする作業場の施設の存在も考えるべきであろう。県道金沢・井波線の南側では多量の石臼が出土しており、これを利用した施設の存在があった可能性もある。

県内における当期の遺跡はあまり調査されていない。城館遺跡を除くとより少なくなる。最近の発掘調査例では、東海北陸自動車道関連の福野町田尻遺跡、姫中町の小倉中稻<sup>15</sup>遺跡や能越自動車道関連の福岡町開幹大滝遺跡がある。同じ東海北陸自動車道関連で発掘した田尻遺跡においては、16世紀~17世紀の約40基の井戸の内、石組井戸<sup>16</sup>が4例見られる。小倉中稻遺跡では、堅穴状土坑が伴う掘立柱建物と石組井戸1基のセットが見られ、この他にも3基の石組井戸が検出されている。開幹大滝遺跡は木舟城の城下町と推定される遺跡で、道に沿って整然と建物が並ぶ。掘立柱建物には堅穴状土坑が伴い、建物1棟につきほぼ1基の割合で井戸が存在する。その位置は建物の裏手に存在し、石組井戸が一般的である。これらと比較すると、他の遺跡においてこの時期になると見られる石組井戸がこの広い梅原胡摩堂遺跡においては1例（それも部分的に利用）しか見られない。地山が堅い礫層の地区は素掘りでも持ちこたえるであろうが、それも一部の範囲であり、ほとんどの地表面は粘質土の地山である。立地的には隆起性扇状地であるため、湧水量は豊富であったろうが、粘質土部分の井壁が長期間持ちこたえるとは考えにくい。そのために、頻繁に井戸の掘削を行った可能性もあるが、それにかかる労働力と資本は並大抵のものではなかったはずである。なぜ、堅固な井戸を造らなかったのか、井戸掘り職人の移動の関係であろうか。

## C 近世

近世の遺構は、遺構の事実記載の章で述べたように、全域にわたって散在化する傾向にある。伝安楽寺跡周辺に遺構が集中する他は、ブロックとして分布する。この時期の井戸は総数で94基検出しており、ほとんどが素掘りである。井戸側をもつものとしては桶積上げのものが2例あるが、1例は遺物を検出してないので時期が遡る可能性もある。石組井戸は一部石組のものが1基、近代のものが1基ある。近世の井戸は中世に比べ直径が大きくなる傾向があるが、構造的変化はない。

遺跡の北、SD1441(自然河川)に沿って、当期の遺構が検出される。川の南側は遺構密度が高い。掘立柱建物7棟、堅穴状土坑を含む大小の土坑が建物を構成する。このうち、掘立柱建物1棟、堅穴状土坑3基、井戸4基がセットとなる所がある。堅穴状土坑の内1基は床面に石を敷き、壁際に石列を組む特殊な構造の遺構で、普通の建物とは異なる性格をもつと考えられよう。井戸<sup>17</sup>4基のうち3基には特徴の変化はあまり認められず、覆土上も砂礫混じりの暗茶褐色粘質土で、意識的に埋めた可能性がある。この東では建物1棟と堅穴状遺構群、井戸<sup>17</sup>4基(+時期不明2基)がセットとなる。すべて

が井戸の機能を果たしたかは不明であるが、建物内部及び周囲に複数の井戸状の造構を掘削しているのがわかる。

伝安楽寺跡前では、17世紀前半の建物が「L」字形状の建物配置を取る例がある。囲まれた内部には、当期の井戸と遺物が出土しなかった井戸が3基検出された。北には方形の土坑・岡地状の造構が配され、中庭の雰囲気が感じ取れる。時期のわかる3基の井戸は建物に重複するが、他の3基はほぼ中央に位置する。また、周辺では17・18世紀の3棟の土台建物が検出されたが、明らかに内部に井戸が伴うとわかる建物は1棟のみで、他の2棟は周辺に当期の井戸は存在するが確定できなかった。

近世になると、中世後期に見られたような量の検出ではなく、やや落ちついた様子を見せる。建物が散在化する傾向にあるためか、建物との関係は少しあり易い。建物1棟に対し、複数の井戸が伴うことは変わらないが、棟数に対する割合は減少する。中世後期に比べより建物とは近接な位置関係にあり、井戸の戸別化が進んだと考えられよう。県内では近世遺跡の調査例はまだ少なく、能越自動車道関連の地崎<sup>ひざき</sup>遺跡では建物1棟に1基の井戸が伴う。井戸側も石組・丸太刳抜きの堅牢なものが造られている。近世民家例においては、建物の中の土間と戸外に各1基が見られる例がある。従って、近世は家に対し1~2基の井戸をもつことが一般的となるよう、逆説的に考えればそれ以上の井戸が伴う場合は特殊な施設か、または井戸以外の遺構と考えるべきであろう。

#### D 結 び

こうして概観してみると、梅原胡摩堂遺跡の井戸は中世前期にいたっては県内の動向と同じくするが、中世後期以後は遺構数の多さと中世後期と近世遺構が重複しているため建物との関係が不明瞭となっている。加えて井戸側の残存率が悪く、それが建物との検討する上でも障害となっている。傾向としては県内の遺跡例と比較すると大きな違いは見られないが、当遺跡は中世前期から近世まで連續

遺 著 名	時 期	建物棟数	井戸数
神川遺跡	12世紀後半~13世紀前半	20	1(+)2
中小泉遺跡	13世紀~14世紀	0	3
じょうくべのま遺跡	13世紀前半	3	0
栗山城原遺跡	12世紀後半~13世紀	3	0
任海櫛合遺跡	12世紀後半~14世紀	11	0
南中田C遺跡	12世紀後半~14世紀	1	0
南中田D遺跡	12世紀後半~13世紀	24	0
古倉A遺跡	12世紀~14世紀	13	0
古倉B遺跡	12世紀~13世紀後半	36	1
北城敷跡	12世紀後半~14世紀	7以上	1
F1谷ノ城北遺跡	12世紀後半~14世紀	12	3
五札遺跡	12世紀後半~13世紀前半	41	5
小倉中綱遺跡	12世紀後半~13世紀前半	1	1
梅原賀賀坊遺跡	12世紀後半~14世紀	9	1
山尾瀬跡	12世紀後半~14世紀	24	2
江上B遺跡	13世紀~14世紀	15	(1)
若宮B遺跡	13世紀~14世紀	19	5
小倉中綱遺跡	13世紀~14世紀	3	4
南中田A遺跡	12世紀	6	0
正印新遺跡	中世	1	0
早月上野遺跡	14世紀~15世紀	8	1
南中田D遺跡	15世紀	14	0
小倉牛宿遺跡	15世紀~16世紀	1	4
開詩大瀧遺跡	16世紀	42以上	30
山尾瀬跡	16世紀~17世紀	1	41
地崎遺跡	17世紀後半~18世紀	2	2

第18表 建物棟数と井戸数

と続いた集落であり、井戸の変遷を知る上でも良好な資料であったはずである。今となって井戸という遺構の定義の難しさを切実に感じる次第である。特に素掘井戸形状の土坑は、深くて湧水があるからといって井戸としてしまうのではなく、それ以外の遺構の可能性も念頭において調査すべきである。また、覆土の成分検査などの自然化学分析を積極的に試みることも必要であろう。

今後、中世後期以後の集落の調査例の増加を待ち、再び梅原胡摩堂遺跡の井戸を再検討する機会が与えられることを望む。  
(島田美佐子)

注1 宇野隆夫 1982 「井戸考」『史林』第65巻第5号

注2 富山県埋蔵文化財センター 1990『栗山城原遺跡 南中田A遺跡 任海櫛合遺跡 南中田C遺跡』

同 1991『富山県富山市南中田D遺跡発掘調査報告書』 同 1993『任海遺跡 古倉A遺跡 古倉B遺跡』

注3 姫中町教育委員会 1993『小倉中綱道路発掘調査報告書』

注4 同 1991『発掘調査概要』(3) 富山県文化振興財團 1990『発掘調査概要』(2)

注5 富山県文化振興財團 1994『姫中町文化財年報』(5)

## 5 葬

近年、各地において中・近世の遺跡の発掘調査がめざましく増加し、北陸においても同様な傾向が窺える。主に集落の調査がほとんどだが、中には単独墓や集団墓地の調査も幾例か見られる。ここでは、梅原胡摩堂遺跡A地区の中世前期の土壙墓検出を契機に、北陸における様相を概観したいと思う。

北陸では中世墓の検出例は少なく、僧侶などの特別の階級の墓を除くと、より少なくなる。しかし、すべての階級の墓を取り扱うと階層性の問題が出てくるので、ここでは特別の階級以外の人々が築いたと推定される墓を中心に検討を進めて行きたい。また、集団墓地などは墓と認識しやすいが、いわゆる建物の敷地内に造られるいわゆる「屋敷墓」といわれるものは副葬品がなければなかなか認識されない。銅鏡などの遺物が出土しつつも、調査員が明らかに墓と断定するにはなかなか難しいようである。従って、実際はより多くの墓を検出している可能性もあるが、ここでは既に調査されたもので墓と推定される遺構を検出した遺跡を取り上げている。

### A 中世前期

この時期の墓はすべて土葬で、木棺に入れて土坑内に埋葬したものと、木棺に入れて穂柳の中に埋葬したものなどがある。

①富山県西砺波郡福光町梅原胡摩堂遺跡 土葬 土壙墓（木棺墓）1基 13世紀初め

S Z1199は長方形の掘形で、供膳された土器の出土状況から木棺墓と推定する。土器は大皿1枚、小皿4枚のセットで検出された。中世前期の土葬墓と供膳具の様相については橘田正徳氏の論考<sup>11</sup>があり、氏の分類によれば、1a類に相当する。1a類は大皿（1～2個体）+小皿（4～6個体）がセットとなるもので、11世紀後半～13世紀末まで認められるようである。供膳具を副葬する様式のなかでは一番古い型に属するようで、その分布は西日本に広く分布するが、畿内以外の検出例は少ない。

②富山県小矢部市白谷岡ノ城北遺跡（文献1） 土葬 土壙墓1基 13世紀前半

遺跡のC地区は東西に流れる溝によって分断され、その北側は掘立柱建物や竪穴状遺構を検出する居住区間で、南側は直径1m以上の土坑が密集する。土坑の埋土には木炭、焼けた骨片などが混入しており、和鏡・銅鏡・中世の土器・陶磁器が出土している。このことから、調査担当者はこの範囲を中世全般にわたる共同墓地と推察している。しかし、遺構の時期を検討すると、北側の建物群の時期は中世前期、南側の土壙墓群の時期が中世後期と明らかに時期差が見られるのである。当初北側に集落が存在していたが、中世後期になると集落を営んでいた集団は姿を消し、南側がその集団のものかは不明であるが、共同墓地となっていた模様が推察されるのである。

南側が墓地化する以前、中世前期の墓S K-8は居住空間の中にあって、S B-1の西1.5mに位置し、建物の南北軸方向と長軸方向を同じくする。規模は南北170cm、東西90cm、深さ20cmで、南北長軸線やや東寄りに中世土器の完形の小皿が3個体検出された。掘形は壁が垂直に立ち上がり、床面は平坦、覆土は黄褐色砂ブロックが混じる黒褐色土の单層で、土器は床面近くから出土している。規模・遺物の出土状況などから土壙墓と考えられる。時期は土器から13世紀前半と考えられ、南側の墓地に先行する比較的古い時期の墓であろう。橘田氏の分類の小皿が1個体から3個体ぐらいで構成される3類にあたり、この類は出現時期・分布範囲は不明だが、13世紀前半では遡るらしい。

③富山県富山市栗山椿原遺跡（文献3） 土葬 土壙墓3基 12世紀後半～13世紀

遺跡中央の東西方向の道・溝によって北と南の遺構群に分けられる。中世の遺構は北半遺構群に属し、3棟の掘立柱建物と溝・土坑が検出された。特に土坑の中で長方形のSK-26・SK-98・SK-116は遺物の出土はないが、墓の可能性が高いとされている。SK-98には上面に人頭大の石が置かれてあ

った。近接する建物S B-10とは主軸方向をほぼ同じくし、その距離はSK-26が一番近く約2m、一番離れたSK-116とは約14m離れる。

④富山県下新川郡朝日町柳田古墓（文献2） 土葬 碓榔墓（木棺墓） 鎌倉・室町時代

碓榔墓といふ特異な形態であるが、木棺墓といふことからここで取り上げる。石室内部の規模は長軸178cm、短軸55cm、深さ40cm～60cmである。掘形は未確認である。石室の内部からは珠洲・中世土師器・鉄釘・歯が出土しており、鉄釘の出土から木棺が埋置されていたことがわかった。埴丘は現状では見られなかったが、過去に採土されるされるまでは高さ約2.1mの埴丘が存在していたらしい。

⑤石川県加賀市三木だいもん遺跡（文献12） 土葬 土壙墓（木棺墓）2基 13世紀後半

この遺跡は12世紀初頭～14世紀中頃まで存続し、おおまかな変遷として11期に分けて捉えている。墓が築かれた13世紀後半は、遺跡中央を東西に溝が走り、南側には8間×5間の大型建物や、倉庫と考えられる小型の建物が検出された。これに対し、墓が検出された北側は小型建物2基が散在するにとどまり、居住空間と一線を画していたようである。木棺墓-1は規模が長辺125cm、短辺84cmの掘形で、長辺111cm、短辺51cmの組合わせ式木棺で、基底部のみ残存する。底板は幅約10cmの板を5～6枚敷いている。遺物の出土はない。木棺墓-2は掘形が長辺170cm、短辺108cm、深さは45cm以上と推定される。北端には中世土師器大1点と小4点の完形品がかためて置かれていた。人骨は残っていない。東側側板には3箇所の立杭が底板の仕口穴にはめこまれて立っていた。また、東側棺外の長軸に沿って多数の竹が詰め込まれた状態で埋められていた。この墓は梅原胡摩堂遺跡と同様1a類に該当する。

⑥福井県武生市家久遺跡（文献22） 土葬 碓榔墓 12世紀後半～13世紀前半

現地説明会資料によれば、長辺3.6m×短辺2.0mの隅丸方形で、その中央部を掘り溢めて碓榔状の埋葬施設を設けたものである。上部構造は不明で、棺の痕跡は確認されていない。郴内からは、白磁四耳壺1、中世土師器（大2、小約10点）、鉄製太刀1、鉄製短刀2、鳥帽子1、硯箱（石硯・水滴・墨・筆）、化粧箱（鏡・毛抜き・はさみ）がある。副葬品の内容からかなりの有力者であったことが窺われる。

この他にも富山県の総合運動公園内遺跡群に属する、南中田D遺跡（文献5）・吉倉A・B遺跡（文献4）からは中世墓の可能性がある土坑が検出されている。前述した栗山権原遺跡もこの遺跡群に属するが、近接するこれらの遺跡からは火葬墓の可能性のある上坑が報告されている。吉倉A遺跡例は人骨かどうかの判断をしていない点に問題があるが、近接する建物は中世前期に属し、火葬墓であるなら集落内の発見では時期的に珍しい例となる。吉倉B遺跡例は上葬墓と考えられるが、土坑長軸が80cm～120cmと短く、13世紀以降土坑の主軸長が短くなる傾向があるとはいえ、検討の余地がある。

また、梅原胡摩堂遺跡においても土壙墓の他に、墓の可能性がある遺構が何例か見られる。やや長大であるが、長方形の珠洲壺底部と中世土師器が出土した土坑（SK1307）、骨片は確認されなかつたが、完形の珠洲四耳壺が出土した方形の土坑（SK2211）がある。性格がやや不明な集石遺構（SX2477・SX2972）、石組の内面が火を受けている石組遺構（SX2458）も焼土・炭化物の出土が見られ、集石墓・碓榔墓または火葬炉の可能性もあるであろう。

中世前期の墓は発掘例が少なく、副葬品などの出土によって明らかに墓とわかるものは少ない。集落内で検出した墓はいわゆる“屋敷墓”的範疇として建物群の付近に存在する。建物群の付近と言いつつも2例は、溝で隔てられた場所に存在し、特に三木だいもん遺跡の例は主たる建物から70m以上も離れており、調査員も墓のある側を墓域として捉えている。従ってこの例は集落の一部を墓域と設

定する意味でいわゆる屋敷墓の概念とは違う性格を有することになる。礫榔墓は2例見られ、いずれも単独墓である。共に身分の高い特權階級の墓と推定され、性格を異にする。しかしながら、家久遺跡の例は、当時の埋葬儀礼を知る上で良好な資料と言えよう。

墓の副葬品は、時には墓のメルクマールにもなる完形の中世土師器が出土し、2例が大1小4のセット、1例が小3のセット、1例が大2小10のセットである。これらは、木棺上に置かれてあったと推定されるものと、棺内にかためて納めてあったものとに分かれる。5個体前後の中世土師器の土葬墓への副葬例は多く、一つの定型として捉えることができる。畿内周辺ではこれを基本に、略式化したもの（枚数にこだわらない）も並存し、貿易陶磁器類に内容を変えながら、14世紀に入ると終息化していくようである。北陸では流通量が少ないためか、貿易陶磁器の副葬例は今のところ家久遺跡例しか見あたらない。5～3枚の中世土師器を副葬する習俗が中世前期に北陸には入って来ていることはつかめるが、類例が少なく、どのような種類や変化が認められるのかまでは不明である。

ところで、5枚の皿はどのような儀礼に関わったのであろうか。棺上に置かれたものと棺内に置かれたものとは意味が違う感がある。真言宗として行う作法を記した「葬法密」には、納棺した後、男は衣服・弓箭・太刀・墨・筆、女は衣服・墨・針はこを入れるとあり、これらは実物ではなく模造品である。また、遺体の上にかぶせたヒキオホヒの上から頭・胸・足の三箇所に砂を散らし、人形を入れる。また、滋賀県の菅浦という集落では、時宗の寺院が行った葬礼の習俗のなかに、ヒルマモチという、葬列において被葬者の妻が笠を裏返してこの上に膳をのせて歩くという。膳には土器に入れた味噌・塩・米・团子6個・ホリ（スキのミニチュア）をのせる。これはあくまでも葬送儀礼であるが、膳の上に5種類の品を土器に入れて運ぶという所作が興味をもたれる。

葬祭儀礼ではないが、5枚の皿を膳に載せて祭るという儀礼は他にもある。高野山金剛峯寺宝性院跡からは、本堂を建設する敷地の四隅と中心に円穴が掘られ、それぞれに5枚の磁皿をのせた折敷が据えられており、各々には盛り物があった。水野正好氏によれば、これは「屋敷地取作法」の遺構ではないかとされている。<sup>注3</sup>ここでは地神に五膳を供するもので、五膳とは五穀粥・切華・抹香・散米・味支を指す。このような呪儀は中世後期～近世に盛行するという。

以上簡単にまとめると、中世前期における墓の様相は、集落から離れた所に墓地を築くのではなく、集落の一角、建物に近接して造られる単独墓の例がある。確認されたものはすべて土葬墓あるが、火葬墓の存在も類例が増えれば予想できる。土葬墓の中には、木棺を遺存するものもある。副葬品には、3～5枚の中世土師器皿を埋納する例がある。この風習は同時期に近畿・西日本などで見られる。この例の三木だいもん遺跡は、「院下文下」や「高山寺文書」から「右庄」の一部の中心部分と考えられている遺跡であり、京都とより密接な関係を維持しながら継続してきた集落である。また、梅原胡麻堂遺跡も4間×9間などの大型掘立柱建物が数棟検出されていることから、文献にはないが開発領主クラスの屋敷跡と推定される。3～5枚の土師器が副葬される風習が畿内からの影響が受け易いところに残っていると推定できないであろうか。

## B 中世後期

この時期は、単独墓例もあるが、集団墓地の検出例が増える。墓の種類も多様化し、土葬墓では土壙墓・甕棺墓などがあり、火葬墓には土壙墓・配石墓・礫榔墓などがある。

- ①富山県東砺波郡井波町錢堀山遺跡（文献16） 土葬 配石造構（甕棺墓？） 14世紀後半～15世紀  
小支丘陵の山頂に立地する単独墓である。土坑の周囲を長方形の配石が二重に囲むもので、盛土は見られない。中央の土坑の中から珠洲片が出土したのみで、骨・焼土などは検出されなかった。こ

れらのことから、出土した珠洲甕を座棺として利用した副葬品であったと推定されている。

②富山県小矢部市白谷岡ノ城北遺跡（文献1） 火葬 15世紀～16世紀

中世前期の頃で概要を記したが、遺跡南側は中世後期には墓地となる。覆土に多量の炭を含み、火葬場としての性格が推定される池状遺構や、大小の土坑群が検出された。土坑の覆土に炭粒・焼骨片が出土することから、火葬墓と推定される。副葬されているものには、土器・石臼・石鉢・和鏡・石硯・漆器・羽口などがあり、五輪塔の一部も出土している。

③石川県穴水町白山橋遺跡（文献13） 火葬 配石遺構 15世紀～16世紀

この遺跡は12世紀末～16世紀にかけての集落で、主体は12世紀末～13世紀中葉である。15世紀中葉～16世紀前半にかけては多数の配石墓からなる墓地となる。配石墓は人頭大～拳大の河原石を組合させたもので、長方形を基本とした崩れたプランが一般的である。特徴的な副葬品として漆器があり、仏教の影響が窺われる三具足が出土した遺構もある。土坑掘形を伴う配石土壤墓と呼べるものに基存在し、土坑中央上面には完形の中世土師器皿が置かれていた。調査員は墓地の主体は下級名主層以下の階級と考えている。

④石川県七尾市細口源田山遺跡（文献14） 土葬墓54基 火葬墓約80箇所

低丘陵の北側の舌状部平坦地に築かれた中世墓群である。墓域の南側には土塁状の遺構が東西に走り、極めて区域を限定している。墓の形態は大きく土葬墓と火葬墓に大別され、土葬墓が先行して造られている。その分布は火葬墓が溝状遺構先端部に偏在しているのに対し、土葬墓は墓域全体に分布する。土葬墓の形態は大きく二つに分けられ、直接埋めたものと木棺墓、または珠洲焼きの甕を伏せて埋めたものがある。副葬品は銅錢が主体で、他に数珠玉・漆器・中世土師器皿などがある。出土位置は床面直上か、壁際で検出されている。

火葬墓は骨蔵器の有るものと無いものとに分けられ、ほとんどが骨蔵器を有する。珠洲の骨蔵器以外は方形の火葬骨ブロックで検出され、四角の木箱を骨蔵器として使っていたことが窺われる。埋めた跡に配石を施すものもあるが、多くは地山土でしっかりと地盤を固める程度である。珠洲の骨蔵器は、口縁を打ち欠いて石で蓋をしている。火葬墓の分布は群に分けて捉えることが可能で、主体となる集團の構造を反映している。また、火葬墓域の一部に集石が見られる地区があり、この中央下層から骨蔵器が出土するものがある。集石墓という一つの形態を取っており、火葬墓に先行して造られたようである。副葬品は銅錢・中世土師器のみで、副葬品以外では大量の中世土師器と五輪塔が出土し、中世土師器は埋葬儀礼に利用されたものがそのまま廃棄されたものらしい。灯芯油痕が付着するものが4割を占め、他は御供皿として利用したと考えられる。

これらの墓の築造者は、丘陵下の低地の一角に基盤をもつ、中世の農民層と考えられており、中世村落における名主的農民層とその下で家父長制の複合家族を構成する名子・下人的農民層を主体とする集團墓（惣墓）として位置付けている。

⑤石川県金沢市普正寺遺跡（文献15） 火葬 14世紀前半～15世紀前半

略長方形の範囲に暗灰色粘質土を土壤状に盛り上げ、中心部には一面に河原石を敷く。この下層に、藏骨器と曲物、または直接穴を掘って火葬骨が埋納されている。壇上には五輪塔を造立しており、後に石仏・宝篋印塔・板碑が追加造立されている。調査員によれば、この墓地は集落の一隅に構築された、特定家系一族が鎌倉中期～南北朝時代の一世纪にわたり累世的に葬られた遺構と考えられている。

⑥新潟県新発田市宝積寺館跡（文献24） 火葬 墓坑・茶毬跡25基 室町・江戸時代

郭内発掘区の北西部に墓坑関連の土坑が集中し、墓域を形成している。墓域外でも群や単独で検出

されたものも数基ある。付近には方形の周溝が検出され、形状・規模から壇や塚が想定される。検出された墓坑は、焼骨や多量の炭化物を含むものと、そうでないものに分けられる。遺物は銅鏡が主で、他に漆器・墨書き板碑・珠洲鏡片・白磁杯がある。これらの墓坑は、埋葬形態・副葬品から館跡に主に関係するものではなく、居館が移った後、寺院として機能するようになった時期の関連遺構と推察される。

中世後期になると、明かに集落と墓地は分けられる。細口源田山遺跡・上町マンダラ中世墳墓群（文献16）のように、意識的な墓域の選択、土壘・堀切による隔離がなされている。墓地が築かれる位置は必ずしも丘陵地などの人目を避けた位置が選ばれているわけではなく、平地の集落が廃絶した後に墓地化した例が見られる。単独墓の例もあるが、それは集団のなかでも特別な階層の人と捉えたい。葬法には土葬と火葬が見られるようになる。火葬は中世前期においても身分の高い者や僧職関係の墓には見られるが、この時期になると北陸では一般的な農民層にまで浸透してきている。これは、北陸は<sup>出4</sup>浄土真宗の影響で火葬が普及したのが早いと言われていることに関係があるのであろうか。

しかし、それも中世後期の後半になってからであって、後期の前半にはまだ土葬のほうが多いようである。土葬には直接埋めたものと、木棺に入れたもの、珠洲の甕を被せるものがある。地上の目印は土まんじゅうだけだったと推定されるものと、配石を伴うものがある。棺として利用される甕は、検出例は珠洲のみで、石川と富山に例があり、在地窯のものを利用していることが特徴的である。

火葬墓の例は、火葬骨を埋納容器に入れて埋めるものと、そのまま土坑を掘って埋めるものがある。埋納容器には、陶器の壺・木箱・曲物などがある。珠洲・古瀬戸などの陶器の壺の藏骨器は、口縁を打ち欠いて石で蓋をする例がある。細口源田山遺跡例では、骨蔵器に陶器を使うものと木箱を使うものが並存していることから、階層差と考えられよう。地上面は、一般に地盤を固める程度のようであるが、目印としての配石・集石を伴うものが増加している。垣吉マツサキ山中世墓（文献21）では、斜面にテラスを造り出し、長方形に石を配石した内部に土坑を掘り、火葬骨を埋納している。また、この時期から五輪塔を造立するものも見られるようになる。

副葬品は、土葬墓では中世土師器は埋納はされるが、主体をなすものではなく数枚のみで、それに変わって銅鏡が主体となって行く。これに数珠玉・漆器などが加わって土壌内に副葬されるようになり、仏教的要素に影響されるようになることが窺われる。火葬墓は、二次的埋葬のためか副葬品は少ない。やはり銅鏡が主体で、何例か漆器片の出土するものもある。鏡などの副葬例もあり、故人の愛用品を棺に入れる風習もこの時期には見られるようである。また、細口源田山遺跡例から、墓地における埋葬儀礼がこの時期には行われていたことがわかる。

## C 結 び

以上、北陸における主な墓の検出例を概観した。墓の検出例がまだ少ないので、特に平地の集落における墓の検出例が少ないためであろう。根本的な墓における問題は、どのような条件において、その遺構を墓と認識するかである。副葬品が残るものは明確であるが、穴を掘って埋めただけでは他の土坑と何等の違いもない。集団で検出されればまだ問題視されようが、単独で検出されれば化学分析という方法もあるが、調査員の経験と勘に頼るしかない。また、墓を造り得た人はどのような身分であったかという問題がある。墓を造る行為そのものが、身分のある証拠という考え方もある。大規模な土木工事をするもの、つまり墳丘や周溝をもつような墓はある程度身分のある階級の人であったことが推定されるが、中世後期に見られる集団墓のような墓は一般的な共同体に属する人々が築いた墓であろうと考える。中世前期においても、遺体を川に捨てたり、野ざらしにしたりすることはあった

であろうが、それは飢饉などの特別な場合であって、一般の庶民が墓を造れないからといって自分の肉親の遺体を放置したとは考えにくい。亡骸よりも魂を重視すれば、亡骸はただの「穢れ」なものでしかないが、当時の人々がいかに「穢れ」に敏感だったとはいうものの、故人に対する感情が強ければ墓を造る意識が生まれよう。中世前期において建物の周囲に「屋敷墓」が営まれたのは、「穢れ」を乗り越えた故人に対する哀惜の情や祖先に対する畏敬の感情からであったのではないだろうか。現在でも、民法で制限されて少なくなったものの、自分の屋敷地内に墓をもつ家は県内でも見られる。これらの風習はこの延長線上にあるのではなかろうか。そして、中世後期になり、惣村の成立に伴って葬送儀礼は共同体として行われるようになり、それは16世紀になって北陸に浄土真宗が広まることにより、より宗教的に堅固な結びつきとなっていったものと考えられる。北陸に火葬が普及するのが早かったのもこれが一因と考えられよう。

このように、墓は精神生活を反映する面で、遺構のなかでも極めて難しい資料といえよう。現在、中世後期の資料は増加しているが、中世前期の資料はまだ少なく、様相はやや偏ったもので明かではない。また、宗教、風習などの民俗学的な見地からも考察を深めていかねばならない。現在でも、多様な宗教・習俗が見られることからも、墓というものを一つに縛って検討を進めるのではなく、階層性・宗教・地方性などの面から、ある程度の分類を行って研究することが必要と思われる。今後、遺跡における土坑の積極的評価を望み、資料の増加を期待したい。

(島田美佐子)

注1 橋田正徳 1993 「中世前期内における土葬墓の出土供膳具の様相」『貿易陶磁研究』NO. 13

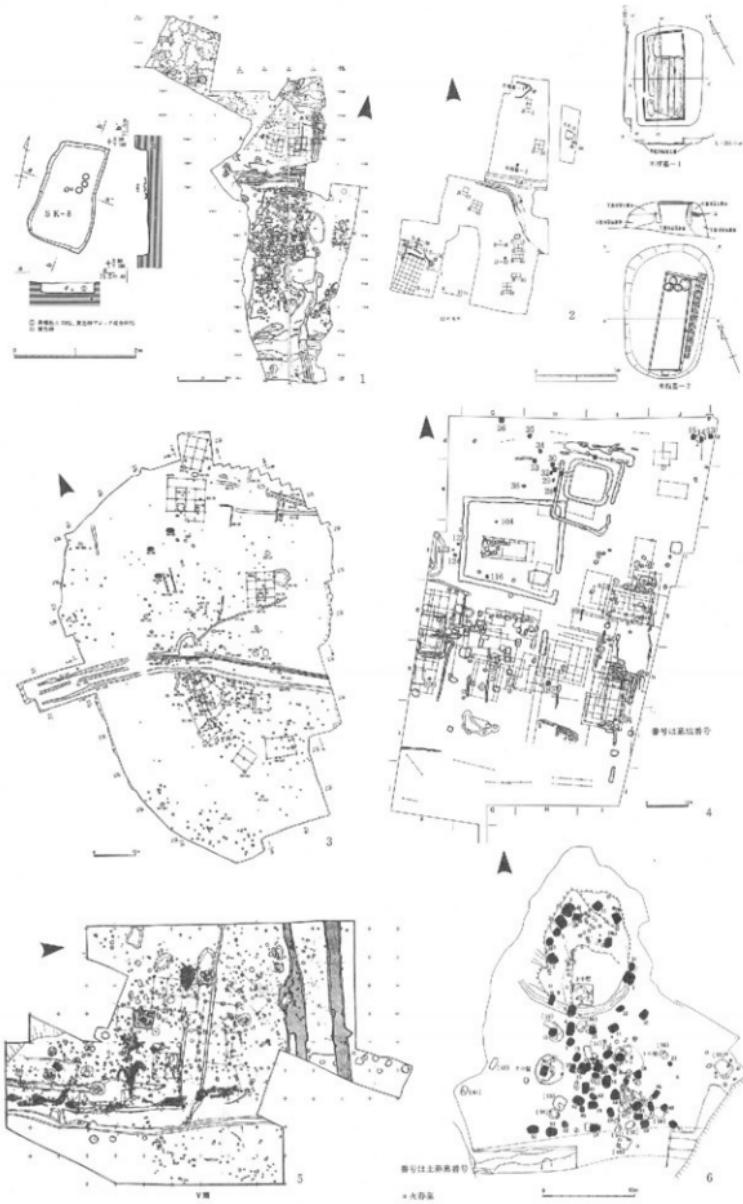
注2 上井久義 1979 「喪葬史序説」『葬送墓制研究集成』第5巻墓の歴史

注3 水野正好 1983 「墨波と家屋の安寧にそとのまじない世界」『奈良大学紀要』第12号

注4 堀 一郎 1951 「我國に於ける火葬の民間受容について」『宗教研究』第127号

#### 引用文献

- 1 山森伸正 1992 『富山県小矢部市白谷岡ノ城北遺跡発掘調査概報』 小矢部市教育委員会
- 2 橋本正・岸本雅敏・山本正敏 1975 『富山県朝日町柳原山遺跡・柳原古墓群急発掘調査概報』 富山県教育委員会
- 3 関清・河西健二 1990 『II 来山堀原遺跡』『来山堀原遺跡・南中田A遺跡・任海緑谷遺跡・南中田C遺跡』 富山県埋蔵文化財センター
- 4 清井重洋・久々忠義・橋本正恭・境洋子・越前慶介 1993 『IV 古倉A遺跡』『V 古倉B遺跡』『任海遺跡』『吉倉A遺跡』『吉倉B遺跡』 富山県埋蔵文化財センター
- 5 斎藤隆・関木淳一郎・河西健二・押川恵子 1991 『富山県葛山市南中田D遺跡発掘調査報告書』 富山県埋蔵文化財センター
- 6 岸本雅敏 1979 『銘山遺跡の調査』 富山県教育委員会
- 7 朝日町教育委員会 1974 『湖町の文化財』
- 8 富山県教育委員会 1980 『昭和54年度富山県埋蔵文化財調査一覧』
- 9 富山県教育委員会 1973 『魚津市石原遺跡発掘調査概報』
- 10 大村正之 1926 『黒沢石器時代遺物包含地』『富山県史譜名勝天然記念物調査会報告第7号』
- 11 定家武敏編 1980 『珠洲古陶・越中における展開』
- 12 小森秀三・荻中正和・中村隼一 1971 『「木だい」もん遺跡』 加賀市教育委員会
- 13 四郷嘉次郎 1987 『遺跡編 IV 白山橋遺跡・西川島』 穴水町教育委員会
- 14 浜岡賢太郎・藤則雄・曾根栄児・桜井憲弘・田中政行・土肥富士夫 1982 『轟口源田山遺跡』七尾市教育委員会
- 15 高樹勝喜・荒木繁行・福田弘光・吉岡康暢・桜井基一・浅青年木 1970 『普正寺』 石川考古学研究会
- 16 西野秀和 1980 『中島町マングラ小丘墳墓群をめぐって』『日本城郭大系』7 新潟 富山 石川
- 17 西野秀和・浅田耕治 1981 『鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
- 18 小松市教育委員会 1971 『輪中川墓群発掘調査概報』
- 19 山田芳和 1976 『能都町の珠洲施設』『石川考古学研究会年報』19号
- 20 辰口町教育委員会 1982 『辰口町下開免茶臼山古墳群』
- 21 北野博司 1992 『埴古△29・30号墳 丘古マツキ山中世墓』 石川県立埋蔵文化財センター
- 22 小瀬忠司 1994 『家久遺跡中の世墓と出土遺物について』『北陸中世土器研究会見学会資料』
- 23 青木豊昭編 1974 『下河内遺跡』『北陸自動車道遺跡調査報告書』第5集 福井県教育委員会
- 24 水野九右衛門 1966 『越前古陶』『陶説』159
- 田中照久 1978~1980 『福井県出土の古越前について』『陶芸館だより』2~5
- 25 田中耕作・鶴巻康志 1990 『三光鉄跡・宝積寺跡』新発田市教育委員会



第326図 中世墓検出遺跡例

1.白谷ノ城北遺跡 2.三木だいもん遺跡 3.葉山慈原遺跡 4.宝積寺伽藍 5.白山櫛遺跡 6.細口源田山遺跡

番名	遺跡名	遺物番号	種類	平面形	高・横	深さ	出土・遺物	時期	備考	文献
富山	城尾胡摩堂	S Z 1199	土器基	長方形	185×80	30	中世十脚器・大(小)4	13C 初め	木棺墓	
同上	千代賀ノ城北	S K -8	土器基	長方形	178×90	20	小供土器器・小S	13C 後半		1
富山	御州		土器基	長方形	178×55	40~60	中世土器器・珠形・鉢 切口	13C・奈良時代	漆器墓、木棺墓	2
富山	薬山塔原	S K -26	土器基	長方形	178×98	34		12C 後半~13C 前半		3
同上		S K -98	土器基	不整長方形	160×90	27		12C 後半~13C 前半		
同上		S K -116	土器基	不整長方形	172×100	36		12C 後半~13C 前半		
福山	吉曾八	S K -9 P 1	火葬墓	円形	550×500	30	須弥器・土器器・中世 火葬器・灰骨・竹升・ 桶子・木棺・火葬化した 遺産(?)	12C 後半~13C 代	小穴付近から灰 化物発見	4
同上		S K -33	火葬墓?	円形	110×100	45	中世土器器・銅鏡	12C 後半~13C 代	墓上に若干の燒 土・灰化物	
同上		P -7	火葬墓?	円形	35×20			12C 後半~13C 代		
富山	吉曾E	S K -13	土器基	長方形	120×90	50	中世土器器	12C 後半~13C 初め		
同上		S K -14	土器基?	長方形	120×110	45	中世土器器	12C 後半~13C 初め		
同上		S K -15	土器基?	長方形	115×80	39	中世土器器	12C 後半~13C 初め		
同上		S K -16	土器基?	長方形	100×70			12C 後半~13C 初め		
同上		S K -17	土器基?	圓丸形	90×75			12C 後半~13C 初め		
同上		S K -18	土器基?	長方形	140×90			12C 後半~13C 初め		
同上		S K -19	土器基?	圓丸形	60×60			12C 後半~13C 初め		
同上		S K -36	土器基?	円形	80	40		12C 後半~13C 初め		
同上		S K -40	土器基?	円形	80	40		12C 後半~13C 初め		
同上		S K -42	土器基?	長円形	100×60	20		12C 後半~13C 初め		
同上		S K -43	土器基?	長円形	100×60	20		12C 後半~13C 初め		
富山	東中南D	S K -309					中世土器器・銅鏡	中世		5
同上		S K -392					銅鏡	小束		
同上		S X -107					銅鏡	中世		
同上		S K -259					骨片	中世		
同上		S K -3263					骨片	中世		
同上		S K -3802					骨片	中世		
同上		S X -91					骨片	中世		
富山	越後山		土器墓	円形	遂500	130	珠洲	14C 後半~15C	一重の万形配石造 墓、豪華な 床面に玉石、螺帽 等	6
富山	荒田ヨリ谷		土器墓2				珠洲・銅鏡・人骨	室町時代		
富山	神谷駒原		土器墓10				珠洲・中世土器器		十九草群跡と見石を 伴う城塁、栗石墓 は施膏有り	8
富山	古岡谷野		火葬墓				珠洲	鑿合・唐町時代		
富山	石垣		火葬墓				珠洲・瀬戸・銅鏡など	江戸時代初期	伏せ墓	9
富山	黒沢						銅鏡・人骨	伏せ墓	伏せ墓	10
富山	大村								伏せ墓	11
石川	二木だいもん		木棺墓?					13C 後半	木棺墓	12
同上			木棺墓?	土器墓	長方形	125×84	10		木棺墓	
同上			木棺墓?	土器墓	長方形	170×108	45	中世土器器(大・小)4	13C 後半	
石川	白山塚		万形火穴式 配石火葬	方形容火穴	285×255	35	中世土器器・珠洲・滅 人・美濃・瓦・路・漆器・ 木棺・鏡	15C 後半~16C 前半	配石墓	13
同上		1号配石		二角形	30~37		漆器		配石墓	
同上		2号配石		直線	145×49				配石墓	
同上		3号配石		円形	65×52				配石墓	
同上		4号配石		弧状	158×100				配石墓	
同上		5号配石		弧状	204×68		中世土器器	15~16C	配石墓	
同上		6号配石		方形	115×65		中世土器器	15~16C	配石墓、二次の被 熱火	
同上		7号配石		長方形	124×89				配石墓	
同上		8号配石		方形	134×77				配石墓、板根被含 む	
同上		9号配石		直線	30~37		中世土器器・珠洲・滅 人・漆器・搖籃木輪・ 板・丸火石・燒石・灰	13C 末~14C 前半 13C 後半	配石墓、火葬後遺 物を埋納か	
同上		10号配石		方形	161×102		中世土器器	14C	配石墓	
同上		11号配石		方形	98×69				配石墓	
同上		12号配石		方形	110~95×30		中世土器器	15~16C	配石墓	
同上		13号配石		方形	136×50		中世土器器	15~16世紀	配石墓	
同上		14号配石		直方形	367~138×50		中世土器器・珠洲・瓦 25・盆・折沿・曲物	13C 末~14C 前半 15~16C	配石墓	
同上		15号配石		放射狀	34~48				配石墓、下部に上 坑	
同上		16号配石			34×30				配石墓	
同上		17号配石		隅丸方形	84×61	89			配石墓	
同上		22号配石		長方形	249		中世土器器・珠洲・滅 人・燒石・木片	13C 前半~後半	配石墓	
同上		23号配石		方形	65×59				配石墓	
同上		24号配石		方形	132				配石墓	
同上		25号配石		長方形	129×67				配石墓	
同上		26号配石		長方形	72×45				配石墓	
同上		27号配石		不整長方形	100×52		中世土器器	13C 末~14C 前半	配石墓、二次の被 熱火	
同上		28号配石		方形	160×38		中世土器器	13C 末~14C 前半	配石墓	
同上		29号配石			160				配石墓	
同上		30号配石		長方形	116×62				配石墓	
同上		31号配石		格円形	216×138	18	中世土器器・珠洲	15C 後半	配石上坑墓	
同上		32号配石		格円形	196×115	10			配石上坑墓	

第19表 北陸の中世墓(1)

係名	遺跡名	遺物番号	種類	平面形	周 長	深さ	出 土 物	時 期	保 存 状	文獻
同上		33号配石	長方形	145×55			中世土師器・床瓦・鐵 鋸・青瓦・瓦砾・殘 瓦	15C後半	配石墓	
同上		34号配石	楕円形	126×115			中世土師器・方銅鏡 昌(引領)・青伊・花瓶・ 壺(台)	15C後半	配石墓	
同上		35号配石	橢円形	280×198	25		中世土師器・鐵・青 磁	15-16C	配石墓	
同上		36号配石	方形+縫内 形				中世土師器・鐵	13C末~14C前半	配石墓	
同上		37号配石	橢円形	324×244	34		中世土師器・珠・鏡	13C末~14C前半	配石墓+灰土	
同上		38号配石		114					配石墓	
同上		39号配石	方形	154×93			中世土師器・漏戸・美 濃		配石墓	
同上		40号配石		147			中世土師器・鐵		配石墓・熱石	
同上		41号配石	方形	69×61					配石墓・二次的被 熱石	
同上		42号配石	方形	83×61					配石墓	
同上		43号配石		113×66					配石墓	
同上		44号配石	方形	107×90			中世土師器・鐵・瓦 器		配石墓	
同上		45号配石	方形	67×60			青磁		配石墓	
同上		46号配石	長方形	95×90					配石墓	
同上		47号配石	長方形	145×62					配石墓	
同上		48号配石	楕円形	140×70					配石墓	
同上		49号配石	方形	125×80					配石墓	
同上		50号配石	方形						配石墓	
同上		51号配石	長方形	148×90					配石墓	
同上		52号配石	方形	107×105	169				配石土坑墓	
同上		53号配石	方形	94×80					配石墓	
同上		54号配石	橢円形	145×108					配石墓	
同上		55号配石	方形	130×85					配石墓	
同上		56号配石	方形						配石墓	
同上		57号配石	方形	110×80					配石墓	
同上		58号配石	長方形	192×161					配石墓	
岩州	横口瀬山	第1号	土器類	椭円形	95×78	44	鐵(鑄)・人骨	15C前半	樂松葬	14
同上		第2号	土器類	椭円形	120×97	51	鐵(鑄)・	14C後半	樂松葬	
同上		第3号	土器類	圓形	104×(80)28	28	鐵(鑄)・鍔・漏戸・人骨	15C前半~中葉	樂松葬	
同上		第4号	土器類	長方形	153×84	85	鐵(鑄)・鍔・鐵瓦・漆 器・人骨		木棺墓	
同上		第5号	土器類	橢円形	93×80	57	鐵(鑄)・鉗(25)・漆 器・白(3)		木棺墓・標示石	
同上		第6号	土器類	橢円形	161×89	110	鐵(鑄)・木棺・衝		木棺墓	
同上		第7号	土器類	橢円形	125×120	94	鐵(鑄)②			
同上		第8号	土器類	橢円形	121×94	69	鐵(鑄)⑤・石(5)			
同上		第9号	土器類	長方形	112×56	57	鐵(鑄)⑥			
同上		第10号	土器類	長方形	111×82	63	鐵(鑄)⑬			
同上		第11号	土器類	楕・長方形	113×86	48	鐵(鑄)⑥			
同上		第12号	土器類	橢円形	93×84	51	鐵(鑄)③			
同上		第13号	土器類	楕・長方形	103×70	49	鐵(鑄)⑥			
同上		第14号	土器類	長方形	116×87	97	鐵(鑄)④・自然石(2)			
同上		第15号	土器類	橢円形	128×(105)	29	鐵(鑄)⑥			
同上		第16号	土器類	橢円形	98×58	47	鐵(鑄)③			
同上		第17号	土器類	橢円形	122×101	38	鐵(鑄)④			
同上		第18号	土器類	橢円形	142×94	60	鐵(鑄)⑩・漆器			
同上		第19号	土器類	橢円形	107×87	36	鐵(鑄)⑯			
同上		第20号	土器類	橢円形	105×69	44	鐵(鑄)⑨			
同上		第21号	土器類	橢円形	111×90	31	鐵(鑄)⑤			
同上		第22号	土器類	橢円形	77×70	39	鐵(鑄)②			
同上		第23号	土器類	橢円形	52×43	29	鐵(鑄)⑪			
同上		第24号	土器類	不整長方形	91×69	10	鐵(鑄)⑯			
同上		第25号	土器類	網目長方形	130×68	73	中世土師器	15C後半~16C		
同上		第26号	土器類	長方形	142×106	82	中世土師器			
同上		第27号	土器類	不整長方形	104×90	54				
同上		第28号	土器類	橢円形	114×83	72	中世土師器	15C前半~中葉		
同上		第29号	土器類	橢円形	124×86	56	骨片			
同上		第30号	土器類	橢円形	100×75	35				
同上		第31号	土器類	橢円形	99×65	64				
同上		第32号	土器類	不整長方形	88×62	55				
同上		第33号	土器類	橢円形	96×89	38				
同上		第34号	土器類	橢円形	131×84	57				
同上		第35号	土器類	橢円形	110×84	52				
同上		第36号	土器類	橢円形	106×58	31				
同上		第37号	土器類	不整長方形	99×78	65				
同上		第38号	土器類	小楕・楕形	141×105	38				
同上		第39号	土器類	橢円形	93×79	18				
同上		第40号	土器類	橢円形	84×58	15	中世土師器	15C後半~16C		
同上		第41号	土器類	橢円形	126×82	22				
同上		第42号	土器類	橢円形	125×106	32				
同上		第43号	土器類	橢円形	91×62	58	中世土師器	15C後半~16C		
同上		第44号	土器類	橢円形	114×84	47				
同上		第45号	土器類	橢円形	68×51	19				
同上		第46号	土器類	長方形	98×59	29				
同上		第47号	土器類	長方形	109×58	43				
同上		第48号	土器類	楕・方形容	74×72	57				

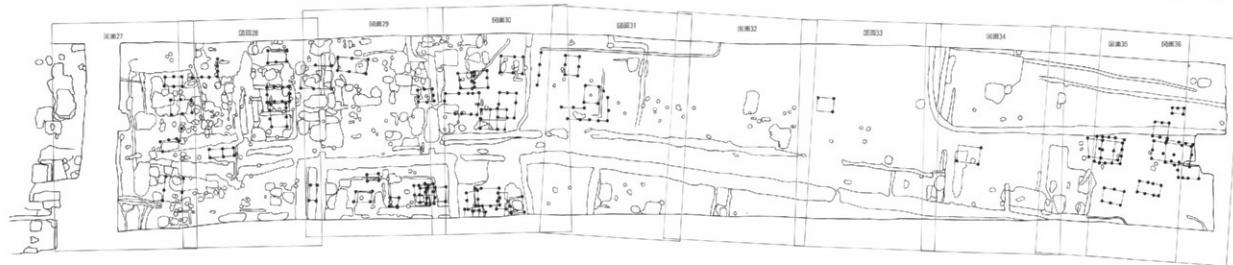
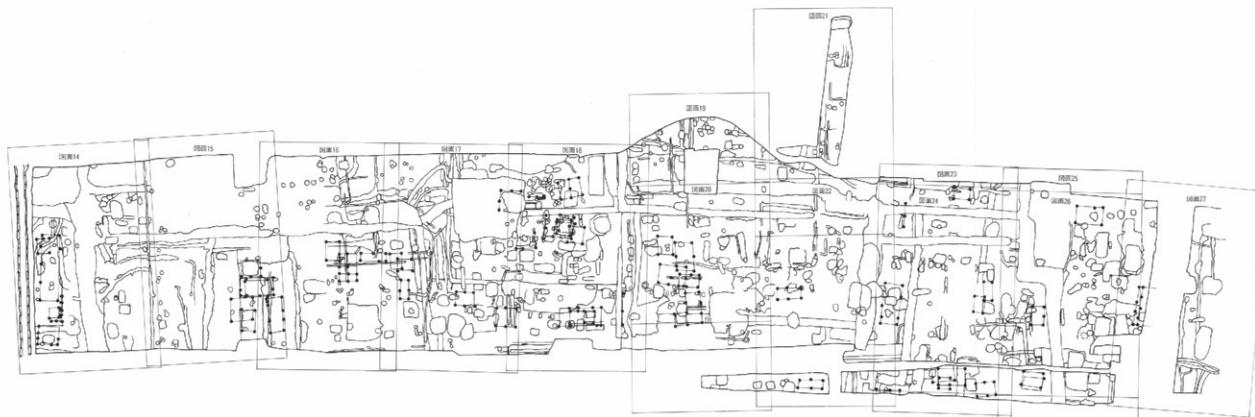
第19表 北陸の中世墓(2)

県名	墓跡名	遺構番号	性質	平高	裏	深さ	出土	遺物	時期	備考	文献
岡山	第49号	土葬墓	長方形	97×70	47				15C後半-16C		
岡上	第50号	土葬墓	不整形山形	94×94	38	中土師器					
岡上	第51号	土葬墓	楕円形	94×78	22						
岡上	第52号	土葬墓	楕円形	123×88	43						
岡上	第53号	土葬墓	不整形山形	111×77	51						
岡上	第54号	土葬墓	長方形	107×84	61						
岡上		火葬墓	長方形	360×240			中土師器・銅鏡		15C前半-16C	骨壺器に珠串・木棺	
石川	普正寺	火葬墓	長方形	360×240			五輪塔(5)-宝篋印塔・瓶心・板鏡・山形物・中世土師器・珠串・漆戸美濃		14C前半-15C前半		15
石川	雨干寺鍍金屋敷	火葬墓									
石川	長瀬カンドウ山中世豪群	火葬墓									
石川	上町マンダラ	火葬墓 土葬墓									
石川	白山町墳墓	火葬墓	長方形	500×300	30		五輪塔・五輪塔・火葬塔・板鏡・青白磁・五重塔		13-16C?	配石墓	17
石川	越前中臣墓跡群	火葬墓							14C-15C	配石墓	18
石川	金谷古墳	土葬墓									19
石川	下関発茶臼山中古墓	第1号墓	土葬墓	340×240	100					墓跡前面に多段の中土師器	20
石川	同上	第2号墓	土葬墓	長方形	210×210	100					
石川	知立マツサキ山中歴墓	第1石碑	火葬墓	135×100			骨片			重石をもつ約40cm×30cm、底さ10cmのビット内より少骨出土。配石墓	21
岡上	第2石碑		長方形	350以上×120			前方・珠御・五輪塔		15C後半以降	地盤設営用石、配石墓	
岡上	第3石碑									配石墓。この地に2基の配石墓	
福井	家久	土葬墓	楕丸形	310×60	30		白毫圓寶(2)-中土師器(2)-火葬鏡(2)-火製鏡(2)-火輪(2)		12C後半-13C前半	楕丸墓。楕丸は360×200の楕丸方形	22
福井	下河端	火葬が15 焼納骨 →26-27 埋2									23
福井	宝積寺	火葬墓								骨壺35	24
新潟	宝積寺經跡	土坑1	円形	(36)×-	(14)		焼骨				25
岡上	土坑5	椭丸形	104×88	39	明治(1)-北宋鏡(2)	11C後半				中央に石2	
岡上	土坑13	方形	113×94	51	寛永通宝(6)-漆片	17C中期				中央上部に大石3	
岡上	土坑14	方形	110×80	20	焼骨微量-寛永通宝	江戸時代					
岡上	土坑15	方形	132×114	38	寛永通宝-漆片	17C中期				炭化物微量	
岡上	土坑26	方形	130×109	48	北宋鏡(6)-漆片	11C後半					
岡上	土坑27	横円形	114×89	50	北宋鏡(6)-板鏡	11C後半				上部に板鏡含む大石	
岡上	土坑28	方形	110×78	49	北宋鏡(2)	11C後半				2個1個に小柱穴	
岡上	土坑29	楕円形	46×23	31	北宋鏡(5)	11C後半					
岡上	土坑30	方形	109×92	4						炭化物多量、赤瓦跡	
岡上	土坑31	方形	109×99	11						炭化物多量、炭化水素片、弯曲に參入の石2、系縄跡	
岡上	土坑32	楕円形	80×51	21	北宋鏡(3)-漆片	11C後半					
岡上	土坑33	方形	95×79	9						焼骨多量、底面に土壁の石2、北壁熱溶化、系縄跡	
岡上	土坑34	直横円形	120×84	8						焼骨多量、底面内凹、系縄開迷の土坑	
岡上	土坑35	直横円形	103×77	8						焼骨多量、底面に土手の石1、底面凸四、系縄開迷の土坑	
岡上	土坑36	直横円形	87×70	28	焼骨多量-北宋鏡(6)					焼骨多量、底面凸四	
岡上	土坑37	-	-	(14)	北宋鏡(1)-珠銘	15C前半				大小の石瓦物	
岡上	土坑38	蛋円形	65×60	13	焼骨微量					焼骨物多量、底面凸四、系縄開迷の土坑	
岡上	土坑39	蛋円形	80×50	13	焼骨少量					焼骨物多量、底面凸四	
岡上	土坑40	円形	(72)×(63)	18	地壳多量-北宋鏡(7)	11C後半				下部に多量の底面	
岡上	土坑41	直横円形	(64)×(40)	12	焼骨多量					焼骨物少量	
岡上	土坑42	円形	80×72	24	焼骨多量-北宋鏡(6)					炭化物多量(底面層)	
岡上	土坑43	横円形	120×96	37	北宋鏡(6)					鉢形に大石1	
岡上	土坑44	横円形	82×60	13	地壳多量-北宋鏡(4)-珠銘	14C後半-15C				炭化物多量(底面層)	
岡上	土坑45	直円形	60×60	11	地骨少量-北宋鏡(2)					炭化物多量	

第19表 北陸の中世墓(3)

## 図面・図版

図面1 造構全体図の割付図



図版 1  
遺構全景



図面2 遺構全体実測図(1)





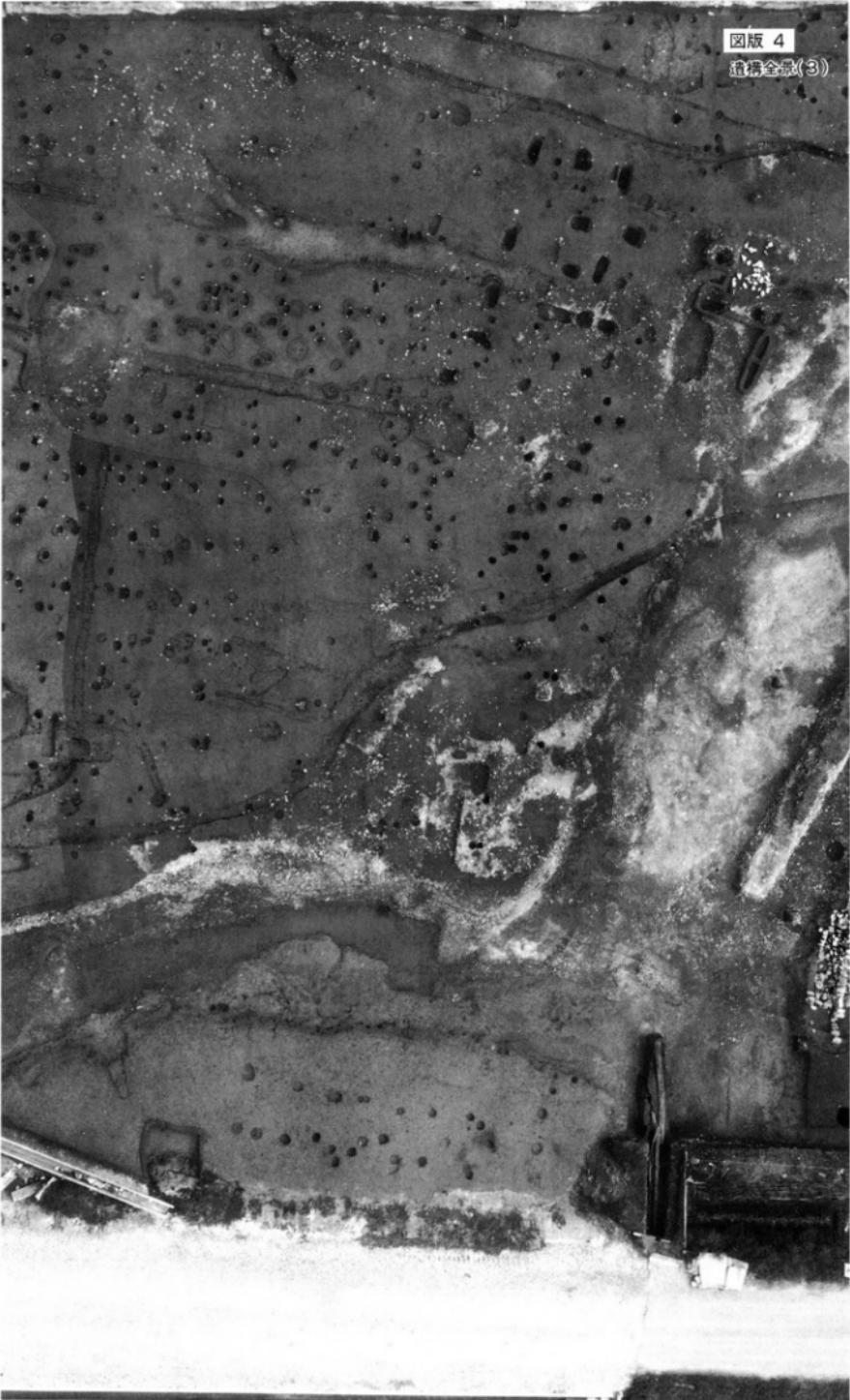
図面3 造構全体実測図(2)





図面4 遺構全体実測図(3)



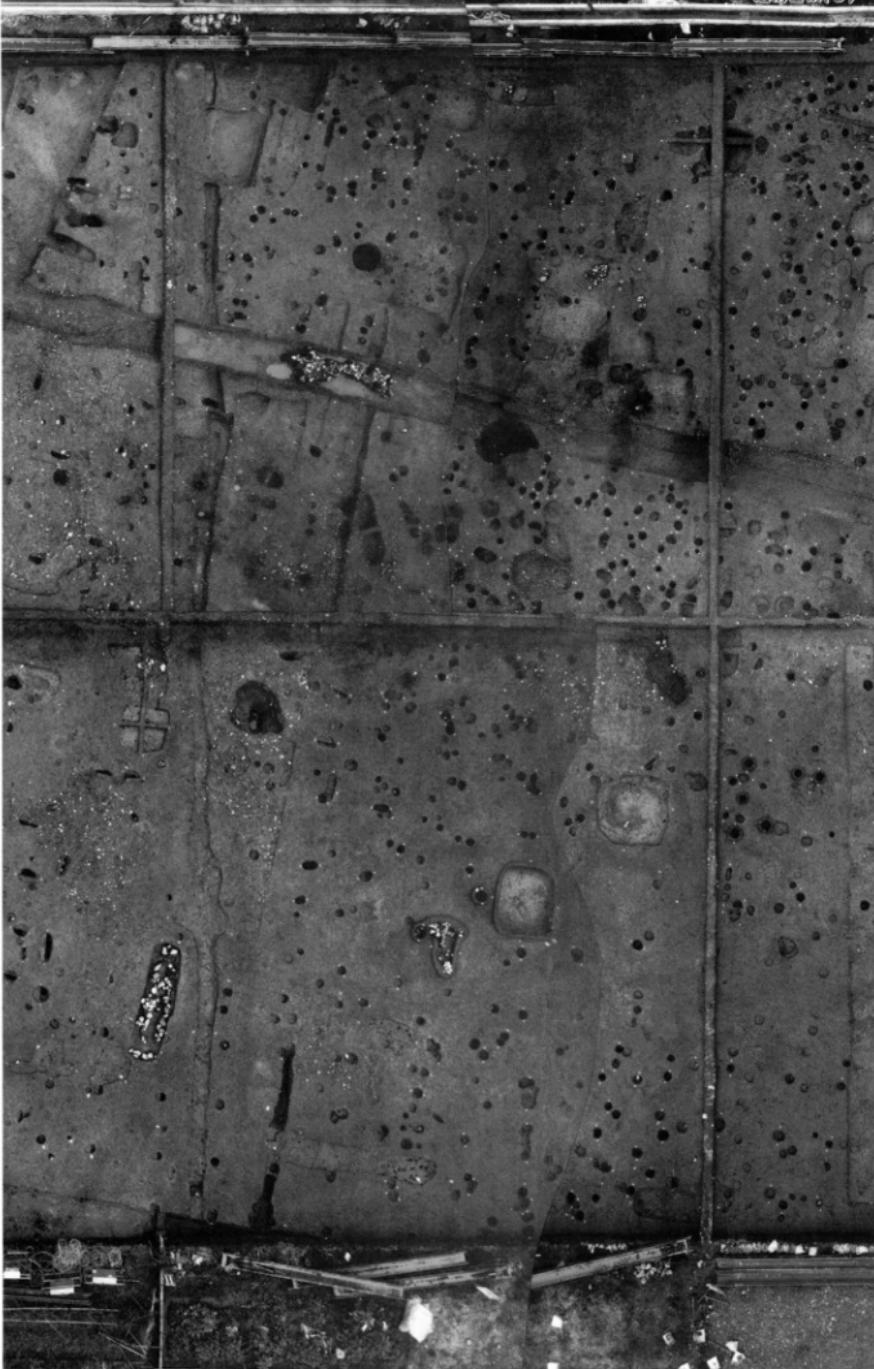




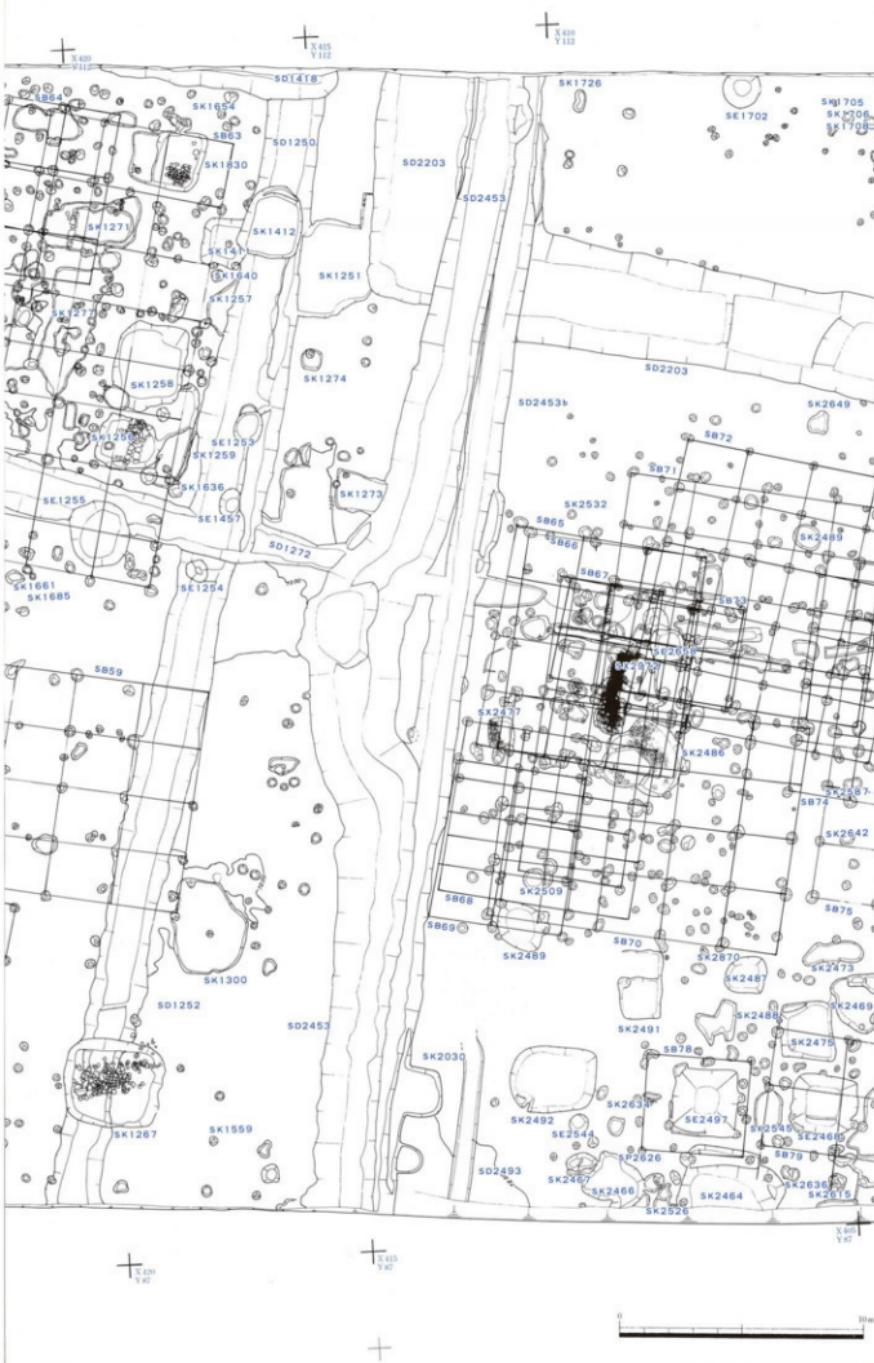


図面6 造構全体実測図(5)



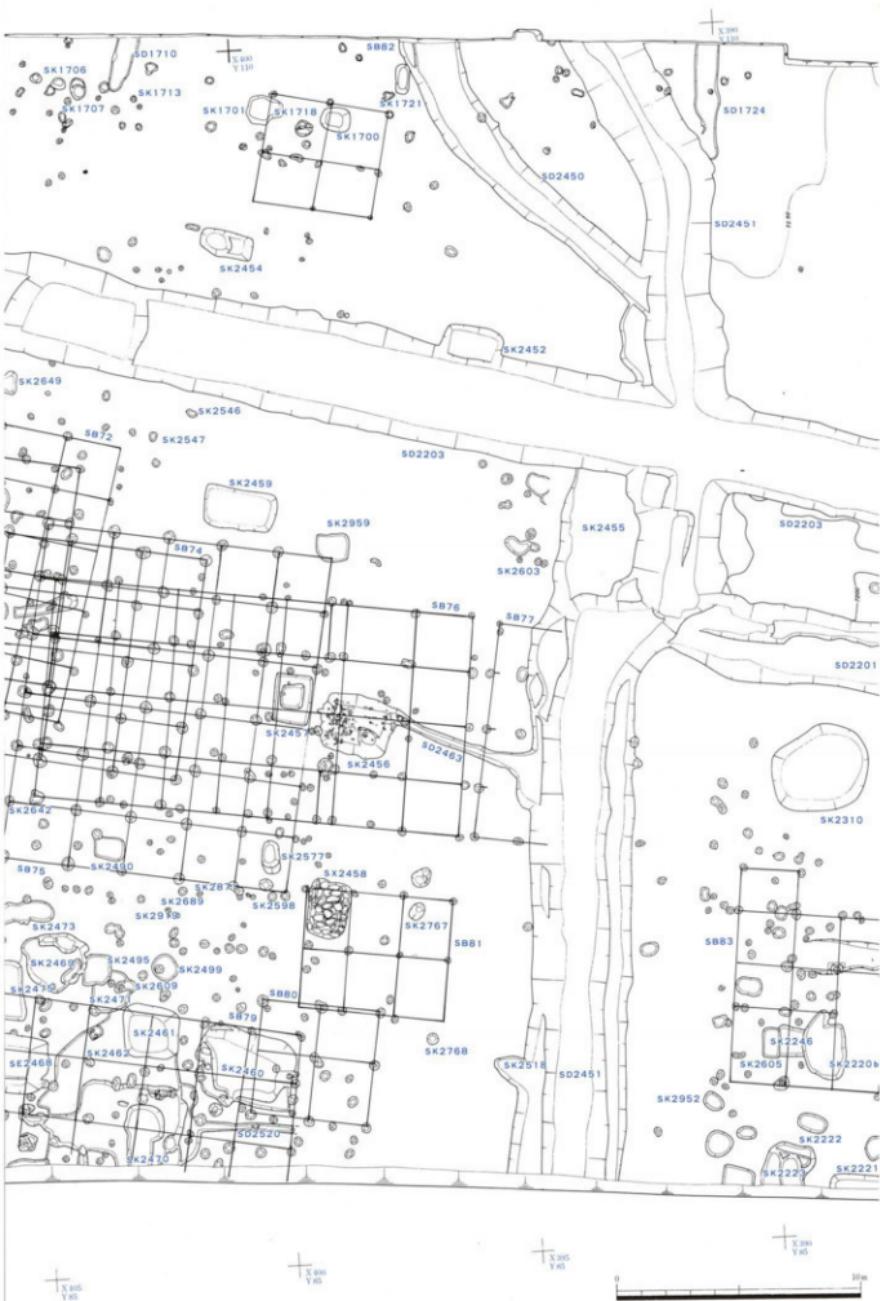


図面7 遺構全体実測図(6)





図面8 造構全体実測図(7)



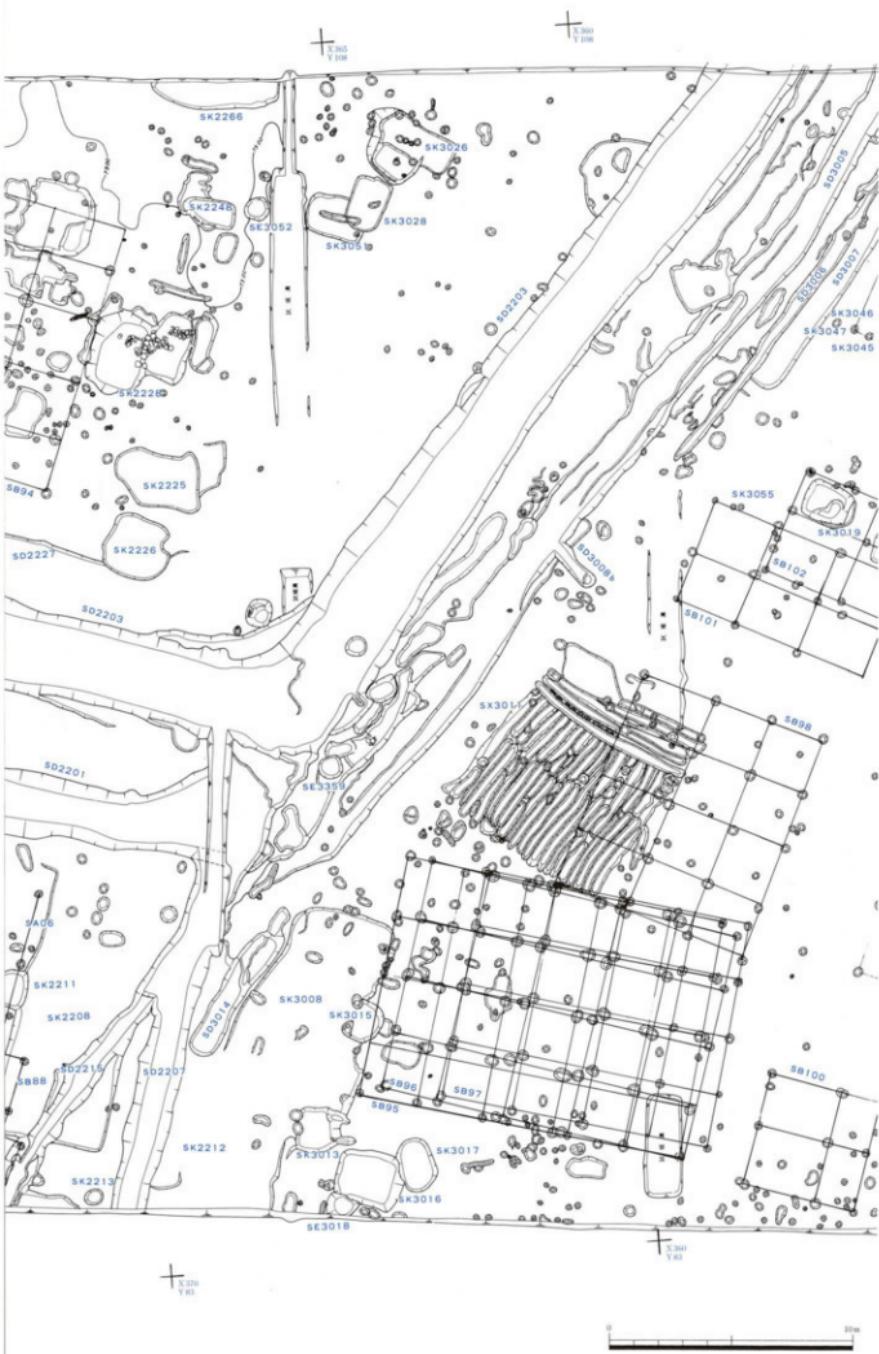


図面9 造構全体実測図(8)





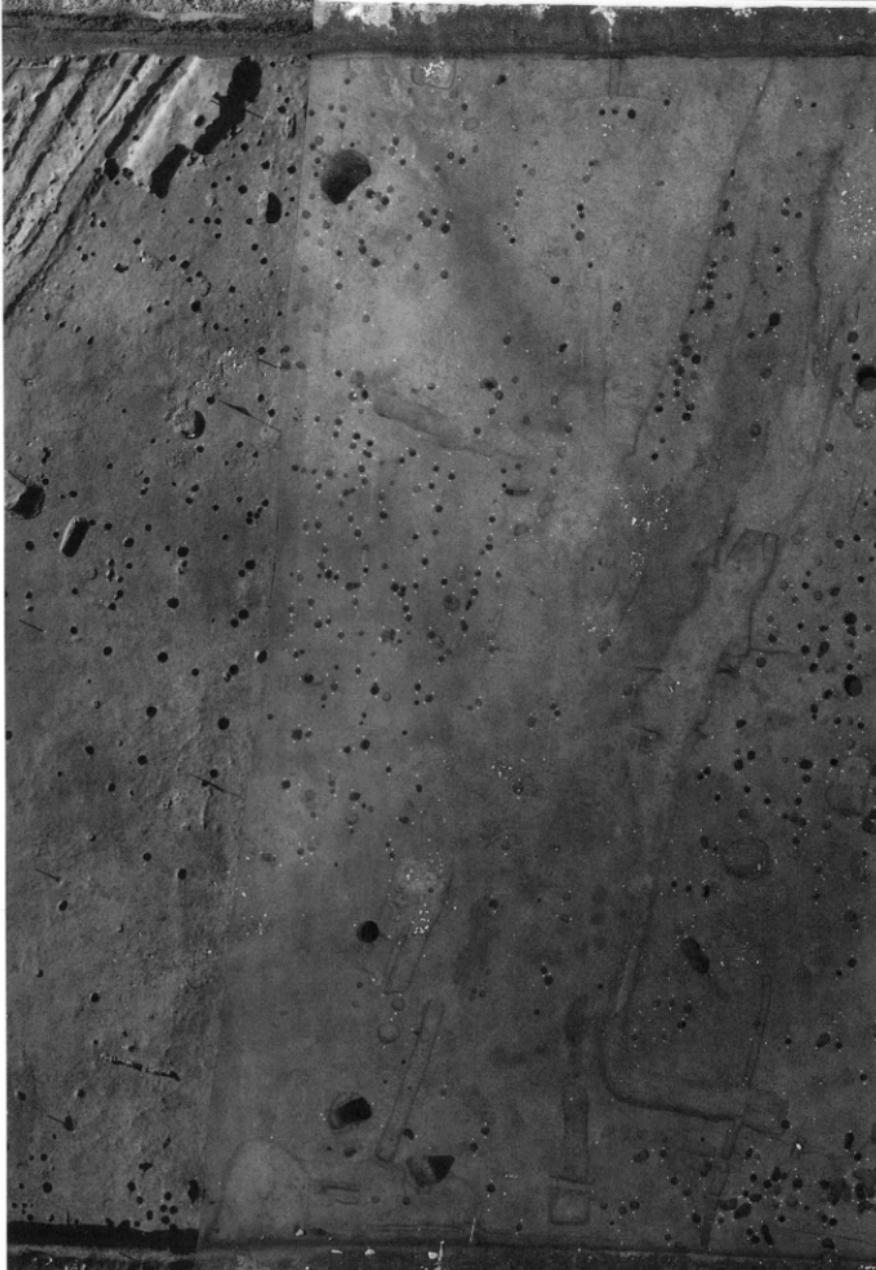
図面10 造構全体実測図(9)





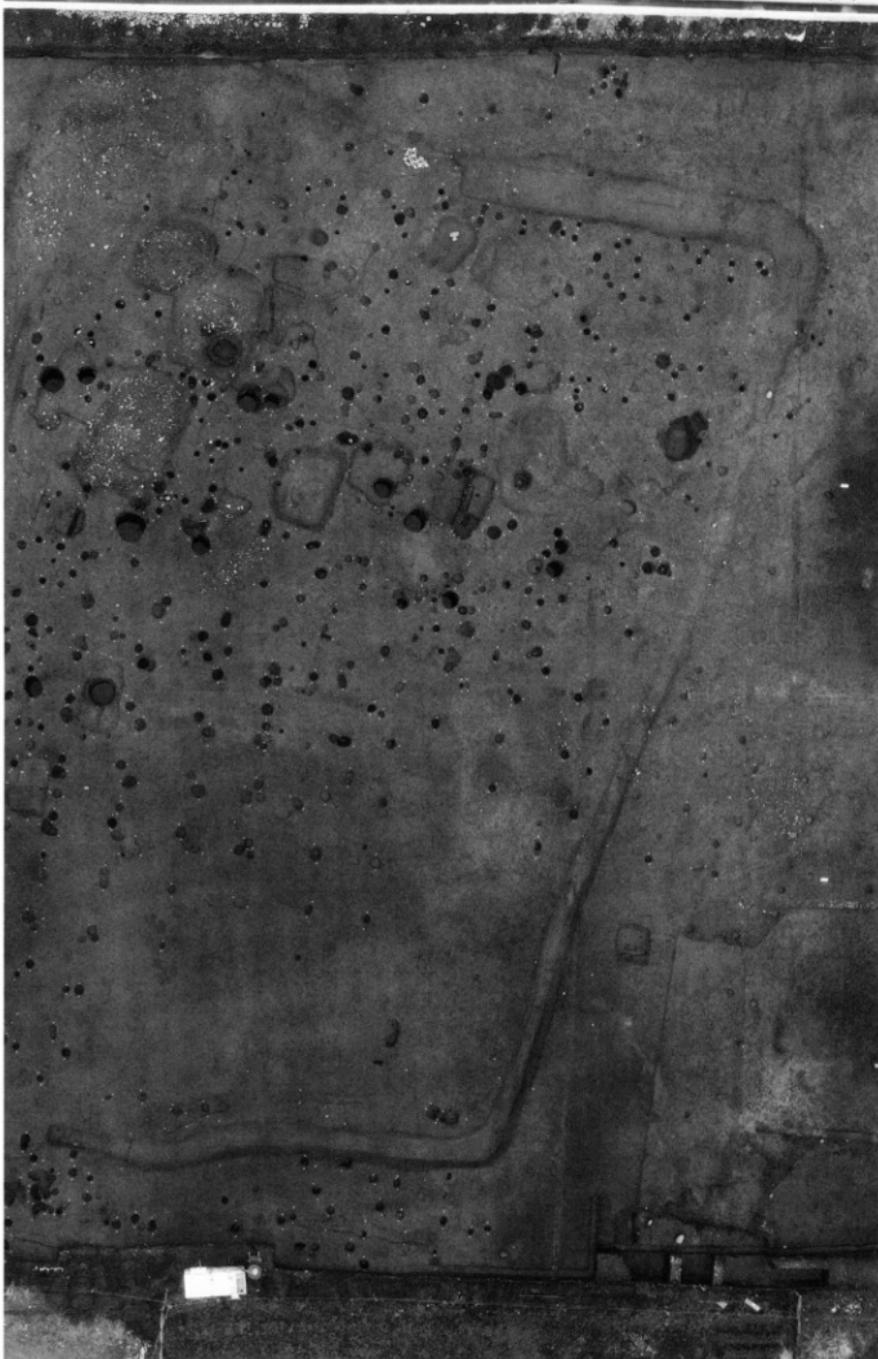
図面11 遺構全体実測図(10)



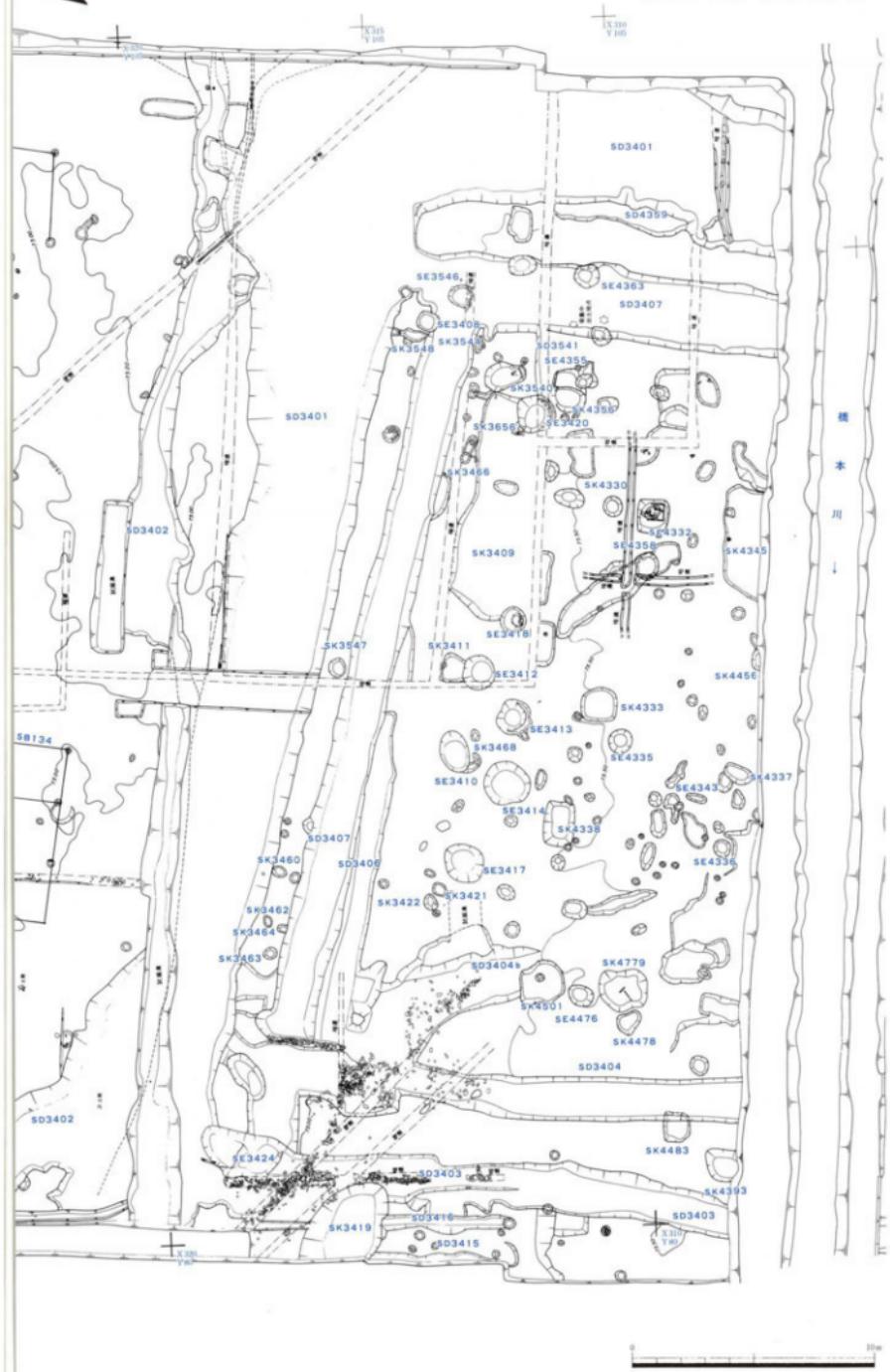


図面12 遺構全体実測図(11)



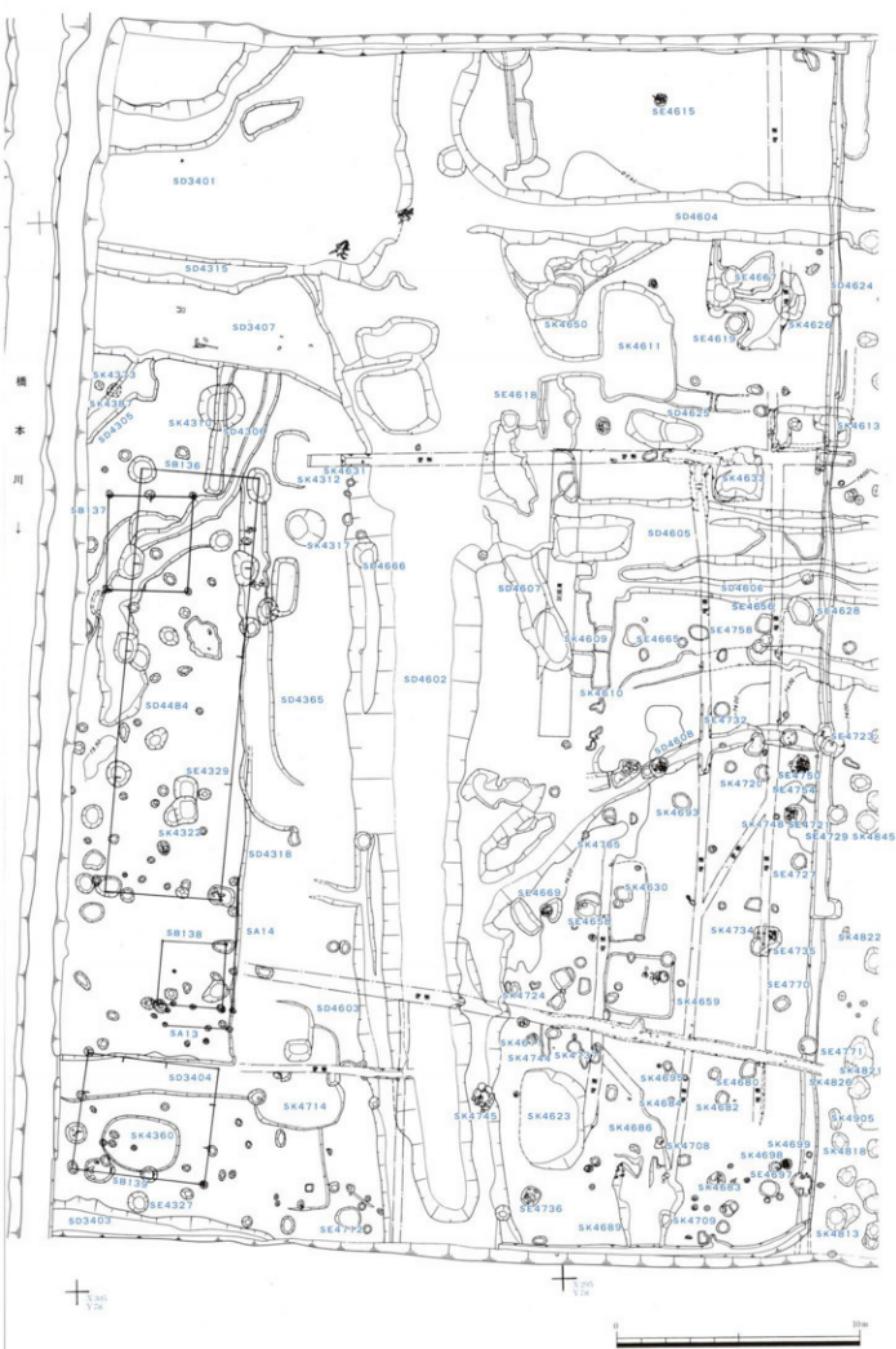


図面13 造構全体実測図(12)





図面14 遺構全体実測図(13)





図面15 遺構全体実測図(14)

